



東京大学 大学院農学生命科学 研究科・農学部

概要

Graduate School of Agricultural and
Life Sciences/Faculty of Agriculture
The University of Tokyo

2017 Highlights



目次

CONTENTS

研究科長・学部長挨拶

1. 沿革	2
2. 歴代研究科長・学部長一覧	4
3. 組織	5
4. 土地・建物	9
5. 附属施設等	10
6. 関連全学センター	13
7. 教職員	14
8. 学生	15
9. 学部卒業生・大学院修了者	17
10. 教育活動	19
(1) 学部教育	19
(2) 大学院教育	29
11. 社会的活動	39
12. 研究活動	41
13. 国際交流	43
14. 環境安全管理室の活動状況	48
15. その他の活動	49
16. 自己点検・評価及び外部評価の実施について	50
17. 予算	51
18. 出版・印刷物・データベース	52
付 農学生命科学研究科・農学部配置図	
附属施設等分布図	

Graduate School of Agricultural and Life Sciences/
Faculty of Agriculture The University of Tokyo

ご 挨 拶



我々人類の生活は、植物が光合成生産する有機物に依存しています。農学は、人口増加に伴い増大する生物資源の需要に応えるだけでなく、生物資源生産の持続性を支える学問として生まれ発展してきました。農学が担う第一次産業は、主に自然環境のもとで生育する生物を対象とすることから、育てる生物の生態・生理特性だけでなく、自然界のメカニズムを理解することが必要です。農地の造成には広大な土地の改変を伴い、作物の栽培には施肥や農薬などによる管理が行われます。生態系や自然環境への影響を最小限に抑え、共存していくための工学的な技術や社会制度、経営システムの研究も必要です。農学は、生命科学から生物資源学、環境科学、工学、経済学、社会科学まで、広範な学問分野が有機的に結びついた総合科学と言えます。

温暖化など地球規模で進行する気候変動が顕在化し、近年では異常気象も頻発し、人命や財産が危険にさらされることが多くなりました。気候変動は、自然環境に依存する第一次産業にも大きな影響を与え、将来的にはさらに深刻な影響が予測されています。安全な食料の安定供給と地球環境の保全が人類にとって最大の課題であり、農学にとって、その解決に向けた技術的や社会的な対策を担う役割は、ますます大きくなっています。つまり生物が有するさまざまな機能を解明し、人間社会の将来に役立てることが期待されているのです。

東京大学では平成27年4月から、国際流動性の向上や学習機会の多様化などを旨とする「国際化」、主体的学びの促進や質の向上・量の確保などを図る「実質化」、4年間を通じた高度教養教育やイノベーション創出を促す専門教育などに向けた「高度化」の3本の柱のもとに、学部教育の総合的な改革がスタートし、初年次教育の充実などの教育内容の改善が行われています。本研究科は、附属施設が管理する森林や水田・畑、牧場などのフィールドと講義室をネットワークで結んで行く、参加型授業を新入生に提供しています。農学部では、確かな専門性とともな俯瞰的な視座の養成を目的に、農学を段階的・体系的に学ぶための課程・専修制をとっています。教育改革にあたっては、専門領域についての深い理解を目指すとともに、多様な学問分野から構成される農学を実感できる、分野横断型教育プログラムの充実を図っています。その一つである産学官民連携型農学生命科学研究インキュベータ機構（アグリコケーン）では、食の安全やバイオマス利用、農における放射線影響などについて、企業や行政、NPOなどと連携した現場での活動を通じた課題解決型教育を実施しています。大学院では、本研究科で行われている先端的な研究活動を教育に反映させて高度な専門性の養成を図るとともに、ゲノムなどの生命情報の農学研究での活用のためのアグリバイオインフォマティクス教育プログラムなど、農学が担うべき課題に関する先端的な研究手法の習得の機会も提供しています。

本研究科では教職員一丸となって総合科学としての農学の発展と優れた人材の育成に向けて努力しております。研究活動につきましては、農学部公開セミナーや放射能の農畜水産物等への影響についての研究報告会などの機会に紹介させていただいております。本研究科の教育研究活動へのご理解、ご支援をよろしくお願いたします。

農学生命科学研究科長・農学部長
丹下 健

年次		摘要
1874. 4	明治 7. 4	現在の新宿御苑内に内務省農事修学場創設
1877.10	10. 10	農事修学場を農学校と改称
1877.12	10. 12	現在の北区西ヶ原に内務省樹木試験場創設
1878. 1	11. 1	農学校、現在の駒場に移転
1880.11	13. 11	1月24日農学校開校式、農場開設
1881. 4	14. 4	家畜病院開設
1882. 1	15. 1	農学校、樹木試験場を農商務省へ移管
1882. 5	15. 5	下総種畜場内の変則獣医生徒が農学校に所属
1882.12	15. 12	農学校を駒場農学校と改称
1886. 7	19. 7	樹木試験場を東京山林学校と改称
1890. 6	23. 6	駒場農学校と東京山林学校を合併し、東京農林学校となる
1893.11	26. 11	東京農林学校を帝国大学に合併し、分科大学として農科大学設置（農学科、林学科及び獣医学科を置き、実施農業に従事する者を養成するためそれぞれの学科に乙科を設ける）
1894.11	27. 11	農場設置
1897. 6	30. 6	農芸化学科設置
1898. 5	31. 5	千葉演習林設置
1898. 9	31. 9	勅令第208号により帝国大学を東京帝国大学と改称
1899. 4	32. 4	乙科を廃し、実科を設置
1899.10	32. 10	演習林本部設置
1902. 4	35. 4	農業教員養成所開設
1902. 9	35. 9	北海道演習林設置
1909. 3	42. 3	農業教員養成所が農科大学の附属となる
1910. 4	43. 4	台湾演習林、代々木演習林及び府中演習林設置
1912.12	大正元. 12	植物実験圃場設置
1914. 6	3. 6	水産学科設置
1916.12	5. 12	朝鮮演習林設置
1919. 2	8. 2	樺太演習林設置
1922. 9	11. 9	秩父演習林設置
1925. 3	14. 3	勅令第13号により東京帝国大学農学部となる
1925. 5	14. 5	愛知演習林設置
1925.11	14. 11	農業経済学科及び農学科農業土木学専修設置
1926. 3	15. 3	箱根演習林設置
1929.10	昭和 4. 10	富士演習林設置
1935. 4	10. 4	二宮果樹園設置
1935. 5	10. 5	林学科田無苗圃設置
1935. 7	10. 7	農学科農業土木学専修を廃し、農業土木学科を設置
1935. 8	10. 8	実科が独立し、東京高等農林学校となる
1936. 7	11. 7	箱根演習林廃止
1937. 4	12. 4	農学部、本郷区向ヶ丘弥生町に移転
1940. 8	15. 8	農場、北多摩郡田無町に移転
1941. 3	16. 3	水産実験所設置（愛知県知多市新舞子）
1943. 1	18. 1	農業教育養成所が独立し、東京農業教育専門学校となる
1943. 4	18. 4	熱帯林業研究所設置
1943. 9	18. 9	林学科に林業学専修と林産学専修を置く
1944. 3	19. 3	樹芸研究所設置（静岡県南伊豆町）
1945.10	20. 10	植物実験圃場を林学科樹木実験圃場と改称
1946. 4	21. 4	二宮果樹園を二宮農場と改称
1947.10	22. 10	農学科畜産学専修設置
1948. 4	23. 4	台湾、樺太及び朝鮮演習林、熱帯林業研究所を終戦により廃止
1949. 4	24. 4	農学科畜産学専修及び獣医学科を廃し、畜産学科（甲類、乙類）設置
		東京帝国大学を東京大学と改称
		農業土木学科を農業工学科と改称
		牧場設置

年 次			摘 要
1950. 1	昭和25.	1	獣医学科再設置
1951.10	26.	10	農学部規則制定
1953. 3	28.	3	東京大学大学院に人文科学・社会科学・数物系・化学系・生物系の5研究科設置
1953. 7	28.	7	牧場および家畜病院官制化
1954. 9	29.	9	園芸実験所開設
1955. 6	30.	6	放射性同位元素施設開設
1956. 1	31.	1	二宮農場を二宮果樹園と改称
1956. 4	31.	4	林学科林業学専修を林学科とし、林学科林産学専修を林産学科としてそれぞれ設置
1957. 4	32.	4	バイオトロン設置
1963. 4	38.	4	田無苗圃を田無試験地と改称
1964. 4	39.	4	農学科を農業生物学科と改称 畜産学科と獣医学科を統合し畜産獣医学科と改称 農業工学科に農業土壌学専修と農業機械学専修を設ける
1965. 4	40.	4	東京大学大学院農学系研究科設置 園芸実験所、放射線育種共同利用施設設置
1965. 5	40.	5	農学部図書館開館
1970. 3	45.	3	水産実験所が静岡県浜名郡舞阪町に移転
1975. 4	50.	4	園芸実験所を緑地植物実験所と改称
1976. 5	51.	5	生物環境制御システムセンター設置
1977. 4	52.	4	農業生物学科に農業生物学専修と緑地学専修を設ける
1977.10	52.	10	農学部図書館は外国雑誌センター館（農学系）に指定
1981. 4	56.	4	大学院農学系研究科畜産学専門課程と獣医学専門課程を統合し畜産獣医学専門課程を設置（修士課程）
1982. 4	57.	4	放射性同位元素施設設置
1983. 4	58.	4	畜産獣医学専門課程（博士課程）を設置
1984. 4	59.	4	獣医学学部教育6年制実施 生物生産工学研究施設設置
1987. 4	62.	4	大学院農学系研究科専門課程制から専攻制へ 大学院農学系研究科に応用生命工学専攻（独立専攻）を設置
1987. 5	62.	5	生物環境制御システムセンター廃止
1988. 4	63.	4	畜産獣医学科を獣医学科と改称
1988. 8	63.	8	600MHz超伝導フーリ工変換核磁気共鳴装置（NMR）設置
1990. 4	平成 2.	4	大学院農学系研究科畜産獣医学専攻を獣医学専攻と改称し、4年制博士課程となる 農業工学科の2専修（農業土壌学専修・農業機械学専修）制度を廃止し、農業工学科となる
1990.10	2.	10	林産学科に材料科学・住工学専修と森林バイオマス化学専修を設ける
1991. 4	3.	4	大学院農学系研究科に応用動物科学専攻（独立専攻）を設置
1993. 4	5.	4	生物生産工学研究施設を廃し、生物生産工学研究センター（学内共同教育研究施設）設置（10年時限）
1994. 4	6.	4	大学院農学系研究科を大学院農学生命科学研究科に改称 学科を廃止し、課程制へ移行（5課程制） 応用生命化学（農芸化学が改称）、応用生命工学、応用動物科学、獣医学の4専攻の整備
1995. 4	7.	4	生産・環境生物学（農業生物学が改称）、森林科学（林学が改称）、水圏生物科学（水産学が改称）の3専攻の整備 アジア生物資源環境研究センター（学内共同教育研究施設）設置（10年時限）
1996. 4	8.	4	農業・資源経済学（農業経済学が改称）、生物・環境工学（農業工学が改称）、生物材料科学（林産学が改称）の3専攻の整備
1997. 4	9.	4	大学院農学生命科学研究科に農学国際専攻（独立専攻）設置
1998. 6	10.	6	寄付講座「食シグナル・生体統御系間相互作用（明治乳業）」設置（設置期間5年間）
1999. 4	11.	4	農場、演習林、牧場、農学部の事務が合同し、農学系事務部が発足
2000. 3	12.	3	東京大学弥生講堂竣工 創立125周年記念式典を挙げる
2000. 4	12.	4	生圏システム学専攻設置 附属施設を学部附属から研究科附属に移行
2001. 1	13.	1	農学部図書館を農学生命科学図書館と改称
2002.10	14.	10	寄付研究ユニット「荏原バイオマスリファイナリー（荏原製作所）」設置（設置期間5年間）
2003. 4	15.	4	生物生産工学研究センター（学内共同教育研究施設）設置（時限による転換）
2003. 6	15.	6	寄付講座「食シグナル・生体統御系間相互作用（明治乳業）」設置（設置期間5年間）
2003.12	15.	12	寄付講座「機能性食品ゲノミクス（ILSI JAPAN）」設置（設置期間5年間）
2004. 4	16.	4	国立大学法人法の規定により「国立大学法人 東京大学」となる 森林科学専攻樹木実験圃場を農学生命科学研究科附属施設の1つに加え、小石川樹木園と改称
2004. 7	16.	7	アグリバイオインフォマティクス人材養成ユニットを設置（設置期間5年間）

年次		摘要
2005. 4	平成17. 4	放射線育種共同利用施設を放射線育種場共同利用施設と改称
2005.12	17. 12	産学官民連携型農学生命科学研究インキュベータ機構を設置
2006. 4	18. 4	寄付講座「植物医科学（池田理化）」設置（設置期間5年間）
2006. 4	18. 4	技術基盤センターを農学生命科学研究科附属施設の1つに加えた
2006. 4	18. 4	農学部教育課程5課程22専修を3課程15専修へ移行
2006. 4	18. 4	連携講座「エコロジカル・セイフティー学（独立行政法人農業環境技術研究所）」設置（設置期間5年間）
2006.11	18. 11	食の安全研究センターを農学生命科学研究科附属施設の1つに加えた
2007. 1	19. 1	家畜病院を動物医療センターと改称
2007. 1	19. 1	寄付講座「共生社会基盤形成を通じた国土の保安全管理（前田建設工業・熊谷組）」設置（設置期間3年間）
2007. 4	19. 4	寄付講座「味覚サイエンス（日清食品）」設置（設置期間5年間）
2008. 3	20. 3	二宮果樹園閉園
2008. 8	20. 8	弥生講堂アネックス竣工
2009. 7	21. 7	農学生命科学図書館リニューアルオープン
2010. 4	22. 4	生態調和農学機構を設置。 バイオトロンおよび小石川樹木園を技術基盤センターに統合。
2010.10	22. 10	国際農業開発学コース（IPADS）を設置
2011. 4	23. 4	寄付講座「木質構造学（JKHD）」設置（設置期間3年間）
2011. 6	23. 6	演習林の研究部を企画部と教育研究センターに改組
2011. 6	23. 6	田無試験地を田無演習林に改称 愛知演習林を生態水文学研究所に改称 富士演習林を富士癒しの森研究所に改称
2012. 3	24. 3	緑地植物実験地閉所
2012. 4	24. 4	農学部教育課程3課程15専修を3課程14専修へ移行
2012.10	24. 10	寄付講座「微生物潜在機能探索（公益財団法人発酵研究所）」設置（設置期間5年間）
2013. 4	25. 4	技術部を設置
2015. 5	27. 5	寄付講座「食と生体機能モデル学（フォーデイズ）」設置（設置期間5年間）
2016. 4	28. 4	社会連携講座「栄養・生命科学（サントリーグローバルイノベーションセンター株式会社）」設置（設置期間5年間）
2017. 4	29. 4	放射性同位元素施設をアイソトープ農学教育研究施設に改称

2

歴代研究科長・学部長一覧

氏名	任期	氏名	任期
松井直吉 (農科大学長)	1890(明治23) 6. ~1911(明治44) 2.	神谷慶治	1962(昭和37) 11. 8~1965(昭和40) 11. 7
古在由直 (農科大学長)	1911(明治44) 2. ~1919(大正8) 4.	大島泰雄	1965(// 40) 11. 8~1967(// 42) 11. 7
古在由直	1919(大正8) 4. ~1920(// 9) 9.28	畑村又好	1967(// 42) 11. 8~1968(// 43) 11. 4
川瀬善太郎	1920(// 9) 9.28~1924(// 13) 10.16	古島敏雄	1968(// 43) 11. 5~1969(// 44) 4. 6
町田咲吉	1924(// 13) 10.16~1927(昭和2) 10.15	篠原泰三	1969(// 44) 4. 7~1970(// 45) 2.19
鈴木梅太郎	1927(昭和2) 10.15~1928(// 3) 10.18	川田信一郎	1970(// 45) 2.20~1971(// 46) 3.23
岩住良治	1928(// 3) 10.19~1931(// 6) 1. 6	山田浩一	1971(// 46) 3.24~1971(// 46) 10.10
麻生慶次郎	1931(// 6) 1. 6~1933(// 8) 1. 5	松井正直	1971(// 46) 10.11~1977(// 52) 10.10
諸戸北郎	1933(// 8) 1. 6~1934(// 9) 3.30	逸見謙三	1977(// 52) 10.11~1981(// 56) 3.31
高橋偵造	1934(// 9) 3.31~1936(// 11) 3.30	望月公子	1981(// 56) 4. 1~1984(// 59) 3.31
佐藤寛次	1936(// 11) 3.31~1939(// 14) 3.30	鴻巣章二	1984(// 59) 4. 1~1986(// 61) 3.31
菌部一郎	1939(// 14) 3.31~1941(// 16) 3.30	高橋信孝	1986(// 61) 4. 1~1989(平成元) 3.31
鈴木文助	1941(// 16) 3.31~1941(// 16) 11. 7	和田照男	1989(平成元) 4. 1~1992(// 4) 3.31
三浦伊八郎	1941(// 16) 11. 8~1944(// 19) 11. 7	鈴木昭憲	1992(// 4) 4. 1~1994(// 6) 9.30
田中丑雄	1944(// 19) 11. 8~1948(// 23) 11. 7	佐々木恵彦	1994(// 6) 10. 1~1996(// 8) 3.31
浅見興七	1948(// 23) 11. 8~1950(// 25) 11. 7	小林正彦	1996(// 8) 4. 1~1999(// 11) 3.31
吉田正男	1950(// 25) 11. 8~1952(// 27) 11. 7	林良博	1999(// 11) 4. 1~2003(// 15) 3.31
坂口謹一郎	1952(// 27) 11. 8~1954(// 29) 11. 7	會田勝美	2003(// 15) 4. 1~2007(// 19) 3.31
磯邊秀俊	1954(// 29) 11. 8~1957(// 32) 11. 7	生源寺真一	2007(// 19) 4. 1~2011(// 23) 3.31
住木諭介	1957(// 32) 11. 8~1960(// 35) 11. 7	長澤寛道	2011(// 23) 4. 1~2013(// 25) 3.31
越智勇一	1960(// 35) 11. 8~1962(// 37) 11. 7	古谷研	2013(// 25) 4. 1~2015(// 27) 3.31
		丹下健	2015(// 27) 4. 1~

3

組 織

(1) 大学院農学生命科学研究科・農学部

農学部

課 程	専 修
応用生命科学	生命化学・工学 応用生物学 森林生物科学 水圏生物科学 動物生命システム科学 生物素材化学
環境資源科学	緑地環境学 森林環境資源科学 木質構造科学 生物・環境工学 農業・資源経済学 フィールド科学 国際開発農学
獣医学	獣医学

農学生命科学研究科

専 攻	基幹講座／寄付講座／連携講座／協力講座
生産・環境生物学	基幹講座 資源創成生物学、応用生物学領域、基礎生物学領域 寄付講座 植物医科学 協力講座 アジア生物資源学、生産生態学、農地環境放射線学
応用生命化学	基幹講座 生物機能化学、生物生産化学、食品科学 寄付講座 機能性食品ゲノミクス、味覚サイエンス 社会連携講座 栄養・生命科学 協力講座 食品安全化学
応用生命工学	基幹講座 生物分子工学、生物機能工学 寄付講座 微生物潜在機能探索、微生物機能代謝工学、醸造微生物学 協力講座 細胞・分子生物学、生物生産工学
森林科学	基幹講座 森林生命環境科学、森林資源環境科学 協力講座 アジア生物環境学、森林生態圏管理学
水圏生物科学	基幹講座 水圏生物工学、水圏生命科学、水圏生産環境科学 協力講座 海洋生物科学
農業・資源経済学	基幹講座 国際食料システム学、農業構造・経営学、開発政策・経済学 協力講座 汎アジア経済論、生態調和経済学
生物・環境工学	基幹講座 生物環境情報工学、地域環境工学、生物システム工学 連携講座 エコロジカル・セイフティー学 協力講座 生態調和工学、環境材料設計学
生物材料科学	基幹講座 生物素材科学、材料・住科学、バイオマス化学 寄付講座 木質構造学
農学国際	基幹講座 国際動物生産学、国際植物生産学、地球生物環境学、国際開発環境学 協力講座 国際生態系管理
生圏システム学	基幹講座 生物保全学、生圏管理学 連携講座 エコロジカル・セイフティー学 協力講座 生圏相関科学、生圏資源環境学
応用動物科学	基幹講座 高次生体制御学、動物機能科学 協力講座 実験資源動物科学
獣医学	基幹講座 比較動物医科学、病態動物医科学 寄付講座 食と生体機能モデル学 協力講座 疾患モデル学、食品病原微生物学、高度医療科学

アグリバイオインフォマティクス教育研究プログラム
産学官民連携型農学生命科学研究インキュベータ機構

附属施設等

生態調和農学機構 演習林 牧 場 動物医療センター 水産実験所 アイソトープ農学教育研究施設 農学生命科学図書館 放射線育種場共同利用施設 技術基盤センター 食の安全研究センター
--

農学系事務部

総務課	総務チーム（総務・広報情報担当 勤務時間・旅費担当） 人事チーム（人事・給与担当） 研究支援チーム（附属施設・研究協力担当 環境安全担当） 附属生態調和農学機構事務室 附属演習林千葉演習林事務室 附属演習林北海道演習林庶務係 附属演習林北海道演習林会計係 附属演習林北海道演習林資産管理係 附属演習林秩父演習林事務室 附属演習林生態水文学研究所事務室 附属牧場事務室 附属動物医療センター事務室 附属水産実験所事務室 図書チーム（情報管理担当 情報サービス担当 図書情報担当 雑誌情報担当）
経理課	予算・決算チーム（財務・資産管理担当） 施設整備チーム（施設保全管理担当） 経費執行チーム
教務課	学生支援チーム（学部学生担当 大学院学生担当 学生生活担当） 国際学務支援チーム（国際交流担当、留学生担当） 専攻支援チーム

(2) 寄付講座一覧

寄付講座とは、個人又は団体の寄附による基金をもって大学の教育研究活動を実施するため、学部及び研究科等の大学院組織に置かれる講座をいう。

寄付講座の名称	味覚サイエンス（日清食品）／Taste Science (Nissin Food Products Co.)
設置期間	2007年（平成19年）4月1日～2012年（平成24年）3月31日更新 2012年（平成24年）4月1日～2017年（平成29年）3月31日5年間
寄付者	日清食品ホールディングス株式会社
担当教員及び職名	特任教授 朝倉 富子
研究目的	味覚は動物の摂食行動の遺伝子として、人間の食文化の原点として、おいしい食品の工業生産の主軸として、きわめて広範に亘る研究対象となっている。しかも最近は分子生物学やゲノム科学の導入により、その研究は先端ライフサイエンスの主要な一翼を担うまでに進歩してきた。こうした背景を踏まえて発足する本寄付講座「味覚サイエンス」の活動は、味覚の分子機構とその健康との関わりの解析を目的にしつつも、農学生命科学を特徴づける物質科学的視点をもこれに加え、学術・教育・産業に幅広く貢献する目的で遂行される。

寄付講座の名称	植物医科学／Clinical Plant Science
設置期間	2006年（平成18年）4月1日～2014年（平成26年）3月31日更新 2014年（平成26年）4月1日～2019年（平成31年）3月31日5年間
寄付者	株式会社ニッポンジーン ユーロフィンジェノミクス株式会社 タイテック株式会社 ベジタリア株式会社 株式会社ミヨシ 日本電子株式会社 コイト電工株式会社
担当教員及び職名	特任教授 難波 成任 特任教授 橋本 光司 特任教授 市川 和規 准教授（兼務） 山次 康幸
研究目的	地球上で生産可能な食糧の35%、23億人分の食糧が毎年植物病により失われている。これに対して、「植物病理学」をはじめとする植物保護関連のさまざまな分野がこれまで対策を講じてきた。しかし、世界経済のグローバル化、農業生産の大規模化、野菜工場など超集約的農業の展開、さらに園芸愛好家の急増（国民の4人に1人）などにより病気の診断・治療・予防の需要は増加の一途である。本講座第1期では学部教育の実施、教科書発刊、我が国初の「植物病院」の本学開設、「植物医師」養成プログラムの構築、先端的臨床診断技術開発などを実現した。また第2期では、プロの「植物医師」のサポートのもと地域における「コミュニティ植物医師」養成やコミュニティ植物病院開設など、社会啓発活動を推進した。そこで、第3期では、教育プログラムの充実を図るとともに、「植物医師」の社会的地位確立、「東大植物病院」を中核にした「植物病院」ネットワークの構築、高度先端臨床医科学技術の実用化推進と途上国展開を計画している。

寄付講座の名称	機能性食品ゲノミクス（ILSI JAPAN）／ILSI JAPAN-Endowed Chair of Functional Food Science and Nutrigenomics
設置期間	2003年（平成15年）12月1日～2008年（平成20年）11月30日更新 2008年（平成20年）12月1日～2013年（平成25年）11月30日更新 2013年（平成25年）12月1日～2018年（平成30年）11月30日5年間
寄付者	特定非営利活動法人日本国際生命科学研究機構（ILSI JAPAN）
担当教員及び職名	特任准教授 岡田 晋治 特任助教 石島 智子
研究目的	21世紀に入って“食と健康”への社会的関心が一段と高まる中、産学連携の共同研究をめざして開設される本寄付講座は、食品が生体に対して示す諸々の働き（機能）を遺伝子レベルで根源的に解析・評価しつつ栄養面、嗜好面、そして病気予防面に優れた、安全でおいしい食品の設計・開発の主要基盤を提示し、学術の研究・教育および産業の創出・育成の両面で新たな社会貢献を果たす目的で設置される。

寄付講座の名称	微生物潜在機能探索／Microbial Metabolic Potential
設置期間	2012年（平成24年）10月1日～2017年（平成29年）9月30日5年間
寄付者	公益財団法人 発酵研究所
担当教員及び職名	特任教授 尾仲 宏康 特任助教 浅水 俊平 特任助教 菅井 佳直

研究目的	抗生物質をはじめとする微生物由来の低分子化合物が人類にもたらした恩恵は計り知れない。20世紀終盤には微生物由来低分子化合物の探索にかけられる期待は低下するばかりであったが、近年の微生物ゲノム解読により微生物の潜在能力の大きさがあらためて示された。こうした背景を踏まえて発足する本寄付講座では、新しい概念に基づく微生物培養を用いたスクリーニングの実践を中心に、微生物の「ものづくり」に関する潜在能力を引き出すための研究を行うことを目的とする。
------	--

寄付講座の名称	食と生体機能モデル学（フォーデイズ）／Food and Physiological Models (FORDAYS Co.)
設置期間	2015年（平成27年）5月1日～2020年（平成32年）4月30日5年間
寄付者	フォーデイズ株式会社
担当教員及び職名	教授（兼務） 前多 敬一郎 特任准教授 伊藤 公一 特任助教 山中 大介
研究目的	さまざまな食品添加物あるいは飼料添加物の機能的側面を明らかにするためには、その研究に最適化した動物モデルを用いることが必要である。本講座では、種々の食品、食品添加物あるいは飼料添加物の開発に必要な動物モデルの開発とそれら動物モデルを用いた機能解析を行い、食品あるいは飼料添加物開発の基礎研究を実施する。

寄付講座の名称	バイオマス・ショア（光友ファシリティーズ）／Biomass Shore (KOYU Facilities)
設置期間	2016年（平成28年）8月1日～2019年（平成31年）7月31日
寄付者	株式会社光友ファシリティーズ
担当教員及び職名	教授（兼務） 芋生 憲司 特任准教授 倉橋 みどり 特任助教 和辻 智郎
研究目的	地球規模で進行する気候変動により、人類は未だ直面したことのないスケールの課題に対応することを迫られている。本寄付講座では、大気中の温室効果ガスを抑制しながら産業活動を行うシステムの構築を目指す。再生可能エネルギーの徹底した利用や微細藻類から始まる生物生産の多段階利用により、バイオ燃料油（BDF）生産や化成品・医薬品原料を生産する発酵工業、農水産物生業など様々な産業が集積する場（バイオマス・ショア）の実現に向けた課題の解決を目指す。

寄付講座の名称	醸造微生物学（キッコーマン）／Brewing Microbiology
設置期間	2016年（平成28年）10月1日～2021年（平成33年）9月30日
寄付者	キッコーマン株式会社
担当教員及び職名	特任准教授 丸山 潤一 特任助教 片山 琢也
研究目的	日本の伝統である醸造技術・発酵技術に不可欠な「醸造微生物」に関する基礎研究を通じて、技術力の向上、研究成果の社会還元、研究者の育成に貢献することを目的とする。

寄付講座の名称	養生訓を科学する医食農連携（共生バンク）寄付講座／modern Yojokun (Kyosei Bank) endowed chair on cooperation of Food, Agriculture and Medicine
設置期間	2017年（平成29年）2月1日～2022年（平成34年）1月31日
寄付者	共生バンク株式会社
担当教員及び職名	特任教授 田之倉 優 特任准教授 宮川 拓也 特任准教授 宮園 健一 特任准教授 権 娟大
研究目的	現代にも通じる健康長寿実現のノウハウは古く江戸時代に執筆された「養生訓」にある。当該寄付講座は、構造生物学・分子生物学を基盤とした基礎研究と医食農連携による応用研究を柱として、「養生訓を科学し、現代的アプローチにより実践する」研究を推進し、健康長寿に関連する機能性食材、農業革新、及びがん治療、再生医療等の事業シーズを創出することを目的とする。

(3) 社会連携講座一覧

社会連携講座とは、民間企業又は独立行政法人等から受け入れる共同研究の一環として、学部及び研究科等の教育研究を行う大学院組織等に置かれる講座をいう。

社会連携講座の名称	栄養・生命科学／Nutri・Lifescience
設置期間	2016年（平成28年）4月1日～2021年（平成33年）3月31日5年間
連携機関	サントリーグローバルイノベーションセンター株式会社
教育上の担当分野	応用生命化学専攻：食品生化学
担当教員及び職名	教授 佐藤 隆一郎
研究及び教育目的	運動機能を科学的に究明し、食と運動の機能に精通した人材の育成

社会連携講座の名称	育種ゲノミクス／Breeding Genomics
設置期間	2016年（平成28年）11月1日～2021年（平成33年）10月31日5年間
関連する専攻名	生産・環境生物学専攻
連携機関	株式会社 アースノート
担当教員及び職名	教授（兼務） 堤 伸浩 教授（兼務） 藤原 徹 准教授（兼務） 岩田 洋佳 特任准教授 藤本 優
研究及び教育目的	ゲノムと環境に支配された作物の形質を調査し、それらの関係を究明する。作物のゲノム情報解析と育種に精通した人材を開発する。

(4) 連携講座一覧

連携講座とは、高度な研究水準をもつ民間等の研究所や国立の研究機関の施設・設備と人的資源を活用するため、研究機関等との間で協定を結び、それらの研究員に教授等の委嘱を行い大学院教育に従事させ、また、学生にこれらの研究機関等での研究指導を受けさせることができる講座をいう。

連携講座の名称	エコロジカル・セイフティー学／Ecological Safety
設置期間	2006年（平成18年）4月1日～2011年（平成23年）3月31日を更新 2011年（平成23年）4月1日～2016年（平成28年）3月31日5年間 2016年（平成28年）4月1日～2021年（平成33年）3月31日5年間
連携機関	国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構 農業環境変動研究センター
教育上の担当分野	生物・環境工学専攻：大気環境学、土壌環境学、物質循環学、生態系計測学 生圏システム学専攻：農村緑地生態学
担当教員及び職名	教授 米村 正一郎 教授 八木 一行 教授 山口 紀子 教授 三中 信宏
連携目的	東京大学大学院農学生命科学研究科における教育研究の実施に関し、国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構 農業環境変動研究センターが協力して学生の資質向上とともに学術及び科学の発展に寄与することを目的とする。



西東京フィールド（生態調和農学機構）での田植えの風景

（写真提供：生産・環境生物学専攻）



地域経済フィールドワーク実習で、学生諸君が集落の代表の方に聞き取り調査をしているところ

（写真提供：農業・資源経済学専攻）

4

土地・建物

(1)土地

112,834㎡（弥生キャンパス、地震研究所、分子細胞生物学研究所、グラウンド等を含む）

(2)建物

（2017.6.1.現在）

建物名	建築年度	面積(延㎡)	主な使用専攻等
1号館	1926(大正15)	9,747	生産・環境生物学専攻、森林科学専攻、農業・資源経済学専攻、生圏システム学専攻、演習林(企画部、教育研究センター)
2号館	1935(昭和10)	9,382	応用生命化学専攻、応用生命工学専攻、水圏生物科学専攻、生物材料科学専攻、放射性同位元素施設
2号館別館	1967(昭和42)	2,810	応用生命化学専攻、応用生命工学専攻、生圏システム学専攻、農学国際専攻、水圏生物科学専攻
3号館	1941(昭和16) 1998(平成10)	12,391	研究科長室、事務部、教授会室、会議室、水圏生物科学専攻、獣医学専攻、生産・環境生物学専攻、森林科学専攻、応用生命化学専攻、応用生命工学専攻、電子顕微鏡室、産学官民連携室、放射性同位元素施設
5号館	1970(昭和45)	1,960	生物材料科学専攻
6号館	1977(昭和52)	1,344	応用生命化学専攻、応用生命工学専攻、バイオトロン、生物・環境工学専攻
7号館A棟	1993(平成5) 1994(平成6)	8,512	応用動物科学専攻、獣医学専攻、水圏生物科学専攻、生物・環境工学専攻、生物材料科学専攻、農学国際専攻、森林科学専攻、農業・資源経済学専攻、生産・環境生物学専攻、バイオトロン、アジア生物資源環境研究センター、生圏システム学専攻
7号館B棟	1997(平成9)	3,524	
生命科学総合研究棟	2003(平成15)	5,176 (4,366) 計9,542	生産・環境生物学専攻、農学国際専攻、応用生命化学専攻、応用生命工学専攻、放射性同位元素施設(RI)、バイオトロン、(分子細胞生物学研究所)
生命科学総合研究棟B	2011(平成23)	3,677 (3,278) 計6,955	生産・環境生物学専攻、応用生命化学専攻、応用生命工学専攻、獣医学専攻(分子細胞生物学研究所)
生物生産工学センター	1985(昭和60)	2,799	生物生産工学研究センター、応用生命工学専攻
農学生命科学図書館	1964(昭和39) 1993(平成5)	4,161	閲覧室、書庫、事務室、会議室、ゼミナール室、PC端末室
動物医療センター	1990(平成2)	3,010	大動物診療施設、小動物診療施設、検査室施設、獣医学専攻、ゼミナール室、事務室
フードサイエンス棟	2010(平成22)	3,577	食の安全研究センター、産学連携等研究室
東別館	1953(昭和28)	446	応用生命化学専攻、NMR装置
環境調整工学実験室	1971(昭和46)	138	生物・環境工学専攻
分子細胞生物学研究所	1960(昭和35)	1,155 (5,209) 計6,955	農学国際専攻(分子細胞生物学研究所) 生圏システム学専攻(分子細胞生物学研究所)
農学資料館	1937(昭和12)	69	
危険物薬品庫	1966(昭和41) 1971(昭和46) 1976(昭和51) 1976(昭和51) 1978(昭和53) 2001(平成13)	91	(全6棟)
核磁気共鳴装置実験室	1988(昭和63)	120	
弥生講堂	1999(平成11)	998	一条ホール、会議室等
弥生講堂アネックス	2008(平成20)	480	セイホクギャラリー、エンゼル研究棟講義室等
その他		897	物置、ポンプ室、蛋白質研究棟、IML棟一部使用、その他(6棟)
計		76,464	
圃場温室		338	ガラス温室、調整温室、閉鎖系温室等
計		338	
合計		76,802	

5

附属施設等

(1)生態調和農学機構

設置目的:

生態調和農学機構は、農場と緑地植物実験所を統合し、演習林田無試験地（現田無演習林）の教育研究機能を組み入れて、2010年4月1日に誕生した。耕地・緑地・林地からなる西東京フィールドを拠点とし、持続的な生態系サービスと調和する農林業と社会のありかたを解明することをめざして、農学教育研究を進めている。

生態調和農学機構では、教育研究を3つの領域で行う。情報・社会領域では、農林業と社会の関係性を、食品安全、環境保全等の観点から究明する。農林生態系領域では、国土と景観の保全に役立つ生態系管理・評価法を追究する。生物・物質循環領域では、農林業と環境をめぐる生物と物質の挙動を究明する。

こうした教育研究を通して、農林業や農村が今後の持続的社會への移行に果たす役割を明らかにしていく。

所在地:

西東京フィールド（旧農場）：東京都西東京市緑町1-1-1

設置年月:

農学校内農場 1878年（明治11年）1月 多摩農場 1935年（昭和10年）8月
園芸実験所 1954年（昭和29年）4月 生態調和農学機構 2010年（平成22年）4月

土地：西東京フィールド（旧農場）215,830㎡

建物：西東京フィールド（旧農場）5,234㎡

(2)演習林

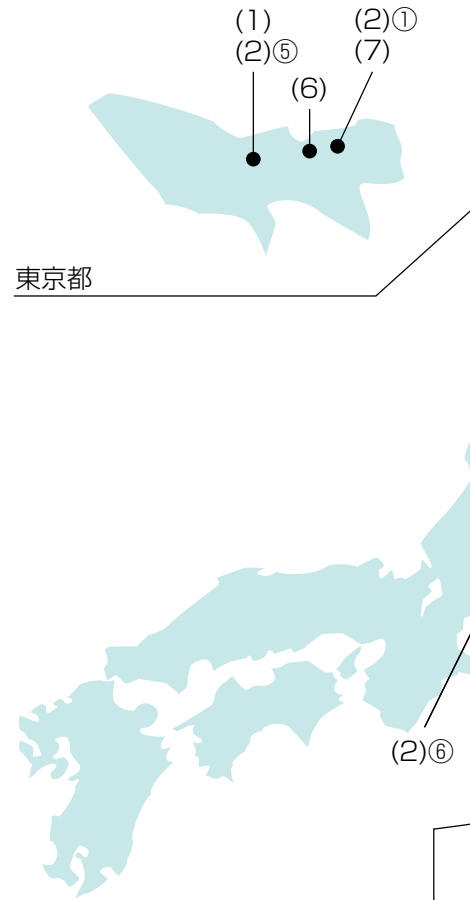
設置目的:

演習林は、森林に関する基礎的ならびに応用的試験研究を行うとともに、学生の実習に供することを目的とした研究教育施設である。

1890年東京農林学校が帝国大学と合併して、農科大学が新設され、1894年その附属施設として我が国初の演習林が房総半島の東南部清澄山林に設置された。これが現在の千葉演習林である。

1898年には官制としての演習林長が置かれ、演習林本部が設置された。その後我が国の森林帯あるいは森林の状況に応じて、北海道演習林以下の各地方演習林が順次設置された。

今日では、演習林は、演習林企画部、教育研究センターと7つの地方演習林によって構成されている。



① 演習林企画部、教育研究センター

所在地：東京都文京区弥生1-1-1（農学部構内）

設置年月：1898年（明治31年）9月
建物：農学部1号館内

② 千葉演習林

所在地：千葉県鴨川市天津770

土地：21,689,179㎡（借入3,790㎡）☆

設置年月：1894年（明治27年）11月
建物：3,327㎡

③ 北海道演習林

所在地：北海道富良野市山部東町9番61号

土地：227,146,549㎡（借入30,885㎡）☆

設置年月：1899年（明治32年）10月
建物：5,163㎡

④ 秩父演習林

所在地：埼玉県秩父市日野田町1-1-49

土地：58,117,472㎡（借入6,221㎡）☆

設置年月：1916年（大正5年）12月
建物：2,128㎡

⑤ 田無演習林

所在地：東京都西東京市緑町1-1-8

土地：90,524㎡

設置年月：1929年（昭和4年）10月
建物：722㎡

⑥ 生態水文学研究所

所在地：愛知県瀬戸市五位塚町11-44

土地：12,940,515㎡

設置年月：1922年（大正11年）9月
建物：1,935㎡

⑦ 富士癒しの森研究所

所在地：山梨県南都留郡山中湖村山中341-2

土地：78,645㎡（借入331,106㎡）☆

設置年月：1925年（大正14年）11月
建物：278㎡

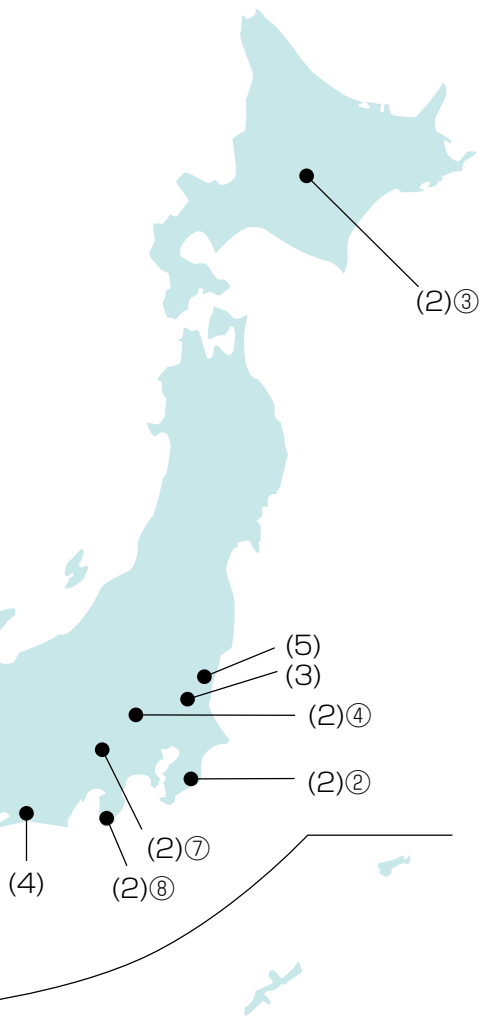
⑧ 樹芸研究所

所在地：静岡県賀茂郡南伊豆町加納457

土地：2,467,128㎡（借入7㎡）☆

設置年月：1943年（昭和18年）1月
建物：1,243㎡

☆…（ ）内数字は外数である。



(3) 牧場（高等動物教育研究センター）

設置目的：

多くの大型産業動物を飼養・維持して、獣医学専修、動物生命システム科学専修、国際開発農学専修、応用動物科学専攻、生圏システム学専攻などの学部及び大学院生に対して実習研修教育にあたり、かつ畜産物の安心安全を保障する人材の育成教育などを通じて市民への食の安全研修にもあたる。加えて、専任教職員と大学院学生にて産業動物科学分野の研究を遂行し、かつ教員と学生による獣医科学、動物科学、医科学分野などの教育と研究のための施設をも提供する。

所在地：茨城県笠間市安居3145

設置年月：1949年（昭和24年）4月

土地：364,882㎡

建物：7,655㎡

家畜飼育頭数：ウマ14 ウシ33 ヤギ82 ブタ25

(4) 水産実験所（水圏生物教育研究センター）

設置目的：

農学部学生・大学院学生（水圏生命科学専修・国際開発農学専修・生圏システム学専攻）に対する実習施設の提供、実験所専任教員による水産増養殖に関する研究の遂行、教員・大学院学生による水生生物の生理・生態・病理・生物化学・育種・養魚・魚病・水質環境等の研究のための施設の提供。

所在地：

静岡県浜松市西区舞阪町弁天島2971-4

設置年月：

1936年（昭和11年）7月 愛知県知多市新舞子（当時の知多郡旭村大字日長）に新舞子実験所開設

1937年（昭和12年）12月 愛知県渥美郡渥美町伊川津（当時の渥美郡泉村大字伊川津）に伊川津実験所開設

1970年（昭和45年）3月 現所在地に移転統合

土地：

19,795㎡（借入）

建物：2,683㎡

(5) 放射線育種場共同利用施設

設置目的：

全国大学関係等の業務を処理するための共同利用施設。農林水産省農業生物資源研究所放射線育種場（1960年4月設立）のガンマー圃場及びガンマー温室その他の施設を大学等の研究者も共同利用できるようにすることを目的に設立されたもので、植物の放射線による遺伝、育種等に関する研究施設である。

所在地：

茨城県常陸大宮市上村田2425（国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構次世代作物開発研究センター放射線育種場内）

設置年月：1965年（昭和40年）4月

土地：379㎡（借入）

建物：81㎡（39㎡借入）☆

☆…（ ）内数字は外数である。

(6) 小石川樹木園

設置目的：

小石川樹木園は、森林植物学に関する教材を植栽、提供するために、1909年に文京区白山の本学大学院理学系研究科附属植物園の北側0.66haに、樹木実験圃場として設置された。2004年には本研究科附属施設となり、樹木に関する生理学、病理学および遺伝・育種学や、森林昆虫の生態学および生理学等の教育研究と実験材料の提供を行っている。

所在地：

東京都文京区白山3-7-1

設置年月：

1909年（明治42年）3月（当時は、植物実験圃場。2004年（平成16年）4月に小石川樹木園と改称）

土地：

6,600㎡（永久借用）

建物：

65㎡

(7) 弥生地区

・動物医療センター

設置目的：市民に公開している動物診療施設であり、開業獣医師からの紹介症例を診察する二次診療施設として運営している。年間のべ約12,000頭を超える市民の伴侶動物について、約90名のスタッフ（教職員、研修獣医師、大学院生など）が対応している。これらの診療活動を通じて、学部生に対する臨床獣医学の講義・実習や臨床獣医師の卒後研修を行なっている。さらに、各種疾病についての基礎研究ならびに臨床研究を実施しており、学内外との共同研究も活発に行われている。

所在地：東京都文京区弥生1-1-1（農学部構内）

設置年月：1880年（明治13年）11月

建物：3,091㎡

・アイソトープ農学教育研究施設

設置目的：放射性同位元素関係の教育研究を目的とし、学部内共同利用施設として設置された。年間の利用者数は、1,000人近くにのぼる全学で最も利用されているアイソトープ施設。

2017年4月1日より放射線生態学（radioecology）の基盤を支えるため「アイソトープ農学教育研究施設」へ改称し、福島を中心としたフィールドに根ざした教育研究を推進している。

所在地：東京都文京区弥生1-1-1（農学部構内）

設置年月：1955年（昭和30年）6月

建物：生命科学総合研究棟内 997㎡

・技術基盤センター

設置目的：東京大学大学院農学生命科学研究科・農学部の教育・研究の高度化を専門性の高い技術の面から推進することを目的とする。

所在地：東京都文京区弥生1-1-1（農学部構内）

設置年月：2006年（平成18年）4月1日

主な施設：

・バイオトロン

設置目的：農林生物の実験・研究は季節及び気象要因に左右されるところが大きく、実験の正確さや再現性に欠ける。その欠陥を補い、制御環境下で農林生物の実験を行うための学部内共同利用施設として1957年（昭和32年）に設置された。自然光ガラス温室、人工照明室、小動物飼育室（水棲動植物・昆虫を含む）からなり、温度・湿度・光などを人工的に調節して、四季の環境条件を再現し、また定温度下にて、植物・小動物・昆虫・菌類・水棲動植物の生育・生理・生態・病理・育種学及び分子生物学的実験研究を行うことを目的としている。

所在地：東京都文京区弥生1-1-1（農学部構内）

設置年月：1957年（昭和32年）4月

建物：農学部6号館・7号館内 約500㎡
生命科学総合研究棟内 75㎡

・食の安全研究センター

設置目的：生産段階から製品に至るまでのフードチェーン全体における食の安全の科学的研究と低リスク食品の開発を行う。食品が媒介する感染症や放射性物質汚染などのリスク評価、それらによる健康被害リスクを低減するための研究、食の安全に関する科学的情報の収集と整理、経済的影響の評価などを様々な専門領域の研究者によって実施する。

所在地：東京都文京区弥生1-1-1（農学部構内）

設置年月：2006年（平成18年）11月1日

建物：フードサイエンス棟内3,577㎡

・農学生命科学図書館

設置目的：農学生命科学研究科・農学部における教育及び研究活動を支援するため、図書・雑誌を収集・保存し、学生・教職員の利用に供する。1977年度からは農学系外国雑誌センター館に指定され、農学・生命科学分野の外国雑誌の収集と、全国の大学・研究機関ならびに研究者等に対する情報サービスを行っている。

所在地：東京都文京区弥生1-1-1（農学部構内）

設置年月：1965年（昭和40年）5月

2009年（平成21年）3月 耐震改修工事竣工

建物：建築面積1,151㎡ 建築延べ面積4,161㎡

主要設備：パソコン（46台）

閲覧席数：160席

蔵書冊数（含演習林）：424,507冊（和書252,759冊、洋書171,748冊）

図書年間増加冊数：4,287冊（和書2,452冊、洋書1,835冊）

雑誌所蔵タイトル数：12,981種（和雑誌7,586種、洋雑誌5,395種）

継続購入雑誌タイトル数：700種（和雑誌258種、洋雑誌442種）

年間入館者数：69,217名

(1) 生物生産工学研究センター（全学センター）

設置目的：近年、環境問題、食糧問題などが深刻さを増しており、近い将来、人類の生存に極めて悪い影響を及ぼしかねない事態に立ち至っている。生物生産工学研究センターは、このような緊急の課題を解決するためのバイオテクノロジー研究を推進する全学センターである。

当センターは、構造生物学を生命科学研究に普及させ、新たなバイオテクノロジーを展開するための中核となるべく、生物制御工学、生物構造工学の2部門からなる学内共同の研究センターとして1993（平成5）年4月に発足した。2003（平成15）年3月より、当センターは、微生物、植物の有用機能を解析・増強するバイオテクノロジー研究をさらに強力に推進し、その成果を環境修復、不良環境地域での作物生産、省エネルギー・環境低負荷型食糧生産、ファインケミカル・医薬品生産に関連する技術開発に応用することを目的とし、環境保全工学、細胞機能工学、植物機能工学の3部門からの構成となった。2012（平成24）年には、「微生物機能代謝工学（協和発酵キリン）寄付研究部門」ならびに「藻と深層水によるエネルギーと新産業創生寄付研究部門」が設置された。2015（平成27）年には、連携部門として「環境生態工学部門」「生合成工学部門」ならびに「植物生産工学部門」が設置された。2016（平成28）年3月には、「微生物機能代謝工学（協和発酵キリン）寄付研究部門」ならびに「藻と深層水によるエネルギーと新産業創生寄付研究部門」が終了し、同年4月には「微生物機能代謝工学（協和発酵バイオ）寄付研究部門」が設置された。当センターは、東京大学大学院農学生命科学研究科応用生命工学専攻の協力講座として微生物・植物分野の教育にも携わり、当該分野の優秀な人材を社会に送りだすことも目的としている。また、学内共同利用の研究センターとして、関連する研究科、研究所、研究センターの研究支援も行っている。

設置年月：1993年4月（平成5年4月）

センター長：妹尾 啓史

(2) アジア生物資源環境研究センター（全学センター）

設置目的：環境を維持しつつ生物生産の持続性を確保するためには、地域の状況に応じた合理的な土地利用や生物資源の有効利用のための新たな方法論および投入エネルギーの少ない生物生産のための新たな技術の開発が必要であり、基礎的研究分野と応用技術的研究分野との融合を図り、さらに国際共同研究を飛躍的に拡大することにより、新たな総合的学問分野を構築する必要がある。

こうした背景の中で、生物資源利用の圧力が大きく、それによる環境破壊の問題が顕著に現れているアジア地域を対象とし、森林から耕地、水域にいたる生態系での生物生産をそれぞれの生態系の環境や地域社会と関連させながら総合的にとらえ、環境を修復・保全しつつ、生物生産の持続性を図るための方法論と技術を開発し、持続的生物生産のための基盤を構築することを私たちは基本的目標としている。

この基本的目標を達成するため、先端的なラボワークとアジア各国の研究機関・研究者と協力したフィールドワークを同時に推進し、基礎研究に裏打ちされた豊かな学際性を持った研究を推進することにより、新たなフィールドサイエンスの方法を開発する。その成果を海外研究拠点における国際共同研究プロジェクトに展開し、アジアの生物資源環境学研究の中核となることを目指す。

設置年月：1995年4月（平成7年4月）

センター長：堀 繁

詳しくは各センター発行の概要を参照してください。



生物生産工学研究センター建物

（写真提供：生物生産工学研究センター）



「問題土壌の環境修復と持続的利用」フィールドセミナー
（カンボジア）

（写真提供：アジア生物資源環境研究センター）

7

教 職 員

(1)教職員数

(2017.4.1.現在)

区 分	現 在 員					現 在 員		
	教 授	准教授	講 師	助 教	計	事務職員	技術職員	計
研究科・学部	79	74	6	63	222	66		66
生態調和農学機構	1	1		3	5	4	13	17
演習林	4	3	5	13	25	13	56	69
牧 場	1				1	2	8	10
動物医療センター	1				1	2		2
水産実験所		1		2	3	1	3	4
技術基盤センター							9	9
合 計	86	79	11	81	257	88	89	177

(2)在職教員の出身校 (学部卒)

(2017.4.1.現在)

大学名		教 授			准教授			講 師			助 教		
		男性	女性	計	男性	女性	計	男性	女性	計	男性	女性	計
東京大学	農学部	62	2	64	54	1	55	7		7	36	6	42
	理学部	4		4				1		1	1		1
	工学部	2		2							2		2
	文学部								1	1			
	薬学部										1		1
北海道大学		1		1	2		2				2	1	3
帯広畜産大学		1		1				1		1			
東北大学		2		2	2	1	3				3		3
茨城大学		1		1									
筑波大学											3		3
宇都宮大学												1	1
埼玉大学											2		2
千葉大学		1		1									
東京農工大学		2	1	3	1		1				3	1	4
東京海洋大学		1		1	1		1						
東京工業大学					1		1						
東京学芸大学						1	1						
横浜国立大学					1		1						
信州大学					1		1						
岐阜大学											1		1
静岡大学											1		1
名古屋大学		1		1	1		1						
三重大学		1		1									
京都大学		2		2	1	1	2		1	1	2		2
大阪大学					1		1						
岡山大学											1		1
山口大学					1		1						
香川大学					1		1						
九州大学						1	1						
宮崎大学					1		1						
その他		1	1	2	3	2	5				11	3	14
合 計		82	4	86	72	7	79	9	2	11	69	12	81

(1) 学部学生定員・在籍者数

(2017.5.1現在)

区 分	定員	後期課程								研究生		合 計		特別聴講学生
		3年		4年		5年		6年		小 計		小 計		
		小 計		小 計		小 計		小 計		小 計		小 計		
		男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	
応用生命科学課程	152	75		84						2		161		
		56	19	59	25					2	0	117	44	
		(1)		(3)						(1)		(5)		
		19		22								39		
		16	3	19	3							35	6	
		(0)		(0)								(0)		
		9		6								15		
7	2	5	1							12	3			
(0)		(0)								(0)				
19		15								34				
17	2	13	2							30	4			
(0)		(0)								(0)				
7		7								14				
4	3	3	4							7	7			
(0)		(0)								(0)				
12		16								1		29		
10	2	12	4					1	0	23	6			
(0)		(0)						(0)		(0)				
環境資源科学課程	108	5		5								10		
		4	1	4	1						8	2		
		(0)		(0)							(0)			
		13		12						1		26		
		10	3	11	1					0	1	21	5	
		(0)		(0)						(0)		(0)		
		9		7								16		
8	1	7	0							15	1			
(0)		(0)								(0)				
24		32						1		57				
21	3	31	1					1	0	53	(4)			
(0)		(0)						(1)		(1)				
31		38								69				
24	7	34	4							58	11			
(0)		(0)								(0)				
8		11								19				
5	3	9	2							14	5			
(1)		(0)								(1)				
21		25						1		47				
16	5	19	6					0	1	35	12			
(0)		(0)						(1)		(1)				
獣医学課程	30	26		27		28		33				114		
		12	14	18	(9)	17	11	20	13			71	50	
		(0)		(0)		(1)		(0)				(1)		
合 計	290	278		307		28		33		6		652		
		210	68	244	63	17	11	20	13	4	2	495	157	
		(2)		(3)		(1)		(0)		(3)		(9)		

(2)大学院学生定員・在籍者数

(2017.5.1現在)

専攻名	修士				博士								研究生		合計			
	定員	1年		2年		定員	1年		2年		3年		4年		小計		小計	
		小計	小計	小計	小計		小計	小計	小計	小計	男性	女性	男性	女性	男性	女性		
		(内外国人学生)	(内外国人学生)	(内外国人学生)	(内外国人学生)		(内外国人学生)	(内外国人学生)	(内外国人学生)	(内外国人学生)	(内外国人学生)	(内外国人学生)	(内外国人学生)	(内外国人学生)	(内外国人学生)	(内外国人学生)	(内外国人学生)	
生産・環境生物学	28	21	33	13	6	9	11							3	83			
		19	2	23	10	4	2	6	3	6	5			2	1	60	23	
		(2)	(1)			(2)	(4)	(7)						(2)	(18)			
応用生命化学	34	66	67	16	11	18	18							6	186			
		34	32	43	24	5	6	12	6	12	6			4	2	110	76	
		(12)	(6)			(5)	(4)	(9)						(6)	(42)			
応用生命工学	43	46	41	20	10	16	26							4	143			
		26	20	26	15	7	3	11	5	18	8			2	2	90	53	
		(9)	(6)			(6)	(8)	(6)						(4)	(39)			
森林科学	20	15	15	10	7	8	14							4	63			
		7	8	12	3	3	4	4	4	9	5			1	3	36	27	
		(2)	(2)			(4)	(3)	(8)						(3)	(22)			
水圏生物科学	30	36	27	15	17	11	25							3	119			
		24	12	19	8	7	10	7	4	18	7			2	1	77	42	
		(7)	(3)			(8)	(2)	(6)						(3)	(29)			
農業・資源経済学	17	8	17	8	4	2	6							2	39			
		7	1	9	8	4	0	2	0	5	1			2	0	29	10	
		(2)	(4)			(2)	(0)	(4)						(2)	(14)			
生物・環境工学	17	14	16	8	6	4	8							0	48			
		13	1	13	3	3	3	4	0	5	3			0	0	38	10	
		(3)	(3)			(4)	(2)	(5)						0	(17)			
生物材料科学	17	23	26	8	12	19	21							5	106			
		17	6	20	6	7	5	10	9	18	3			4	1	76	30	
		(2)	(2)			(8)	(9)	(1)						(3)	(25)			
農学国際	43	30	31	19	8	11	15							7	102			
		17	13	17	14	4	4	8	3	6	9			6	1	58	44	
		(6)	(15)			(8)	(5)	(7)						(6)	(47)			
生圏システム学	25	17	20	18	4	0	8							1	50			
		12	5	16	4	3	1	0	0	5	3			1	0	37	13	
		(1)	(0)			(0)	(0)	(3)						(1)	(5)			
応用動物科学	19	19	12	8	6	5	10							0	52			
		9	10	8	4	4	2	2	3	6	4			0	0	29	23	
		(1)	(1)			(1)	(0)	(3)						(0)	(6)			
獣医学				13	20	19	13	16						2	70			
					10	10	11	8	7	6	9	7		2	0	39	31	
					(4)	(5)	(3)	(3)						(0)	(15)			
合計	293	295	305	156	111	122	175	16						37	1,061			
		185	110	206	99	61	50	77	45	115	60	9	7	26	11	679	382	
		(47)	(43)			(52)	(42)	(62)	(3)					(30)	(279)			

9

学部卒業生・大学院修了者

(1)学部卒業生 22,716人 (2017.4.1現在)

(2)大学院修了者 修士課程 9,788人 博士課程 4,541人

(3)論文提出による学位授与者数 4,621人

(4)卒業・修了後の進路

学部卒業生

区分	卒業生数	就職先等				
		大学院生	官公庁	民間会社	教育機関	その他
2012年度	267	169	10	60	2	26
2013年度	276	182	12	66	1	15
2014年度	275	168	32	59		16
2015年度	269	177	15	64	1	12
2016年度	255	156	22	53	2	22

大学院修了者（博士・満期退学者を含む）

区分	修了生数	就職先等					
		博士課程進学	官公庁	民間会社	教育・研究機関	その他	
2012年度	修士	276	85	22	135	6	28
	博士	162		4	29	50	79
2013年度	修士	258	51	19	153	16	29
	博士	165		2	24	63	76
2014年度	修士	251	62	16	152	9	12
	博士	122		1	24	36	61
2015年度	修士	256	54	25	150	6	21
	博士	125	1	3	17	57	47
2016年度	修士	278	49	21	173	12	23
	博士	107	3	2	16	28	58

(5)主な就職先（2016年度）

学部卒業生

応用生命科学課程

国土交通省、特許庁、国立大学法人お茶の水女子大学、農林中央金庫、伊藤忠商事株式会社、株式会社クボタ、株式会社ティーボット、株式会社博報堂、株式会社ベイカレントコンサルティング、株式会社みずほ銀行、みずほ信託銀行株式会社、三井物産株式会社、三井不動産株式会社、武蔵コーポレーション株式会社、レンゴー株式会社 他

環境資源科学課程

農林水産省、林野庁、経済産業省、独立行政法人国際観光振興機構、独立行政法人国際協力機構、農林中央金庫、信金中央金庫、東京都、石川県、学校法人日本医科大学、アクセンチュア株式会社、鹿島建設株式会社、株式会社カインズ、株式会社シグマックス、株式会社TBSテレビ、株式会社デンソー、株式会社日本政策金融公庫、株式会社日本政策投資銀行、株式会社フォワード、株式会社三井住友銀行、株式会社三菱東京UFJ銀行、住友生命保険相互会社、ソフトブレーン株式会社、東京海上日動火災保険株式会社、日本アイ・ピー・エム株式会社、野村證券株式会社、パナソニック株式会社、丸紅株式会社、三菱UFJ信託銀行株式会社、明治安田生命保険相互会社、楽天株式会社 他

獣医学課程

農林水産省、特許庁、東京都、埼玉県、栃木県、東京中央農業協同組合、北海道ひがし農業共済組合、あさか台動物病院、小野薬品工業株式会社、株式会社三菱総合研究所、グラクソ・スミスクライン株式会社、社台スタリオンソリューションズ、大日本住友製薬株式会社、豊田通商株式会社、日鉄住金総研株式会社、富士製薬工業株式会社、マツケンゼラー・アンド・カンパニー、みずほ証券株式会社 他

大学院修了者 修士

生産・環境生物学専攻

農林水産省、国立国会図書館、国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構、愛知県、新潟県、アサヒ飲料株式会社、アステラス製薬株式会社、株式会社キーエンス、株式会社サカタのタネ、株式会社日本能率協会コンサルティング、株式会社三菱総合研究所、スカイライトコンサルティング株式会社、住友化学株式会社、第一三共株式会社、中外製薬株式会社、東京海上日動火災保険株式会社、トーヨーカネツ株式会社、日本タタ・コンサルタンシー・サービス株式会社、阪和興業株式会社、富士フーダー株式会社、ポーラ化成工業株式会社 他

応用生命化学専攻

農林水産省、特許庁、国立研究開発法人理化学研究所、東京都、アクセンチュア株式会社、旭化成株式会社、味の素ゼネラルフーズ株式会社、花王株式会社、株式会社クイック、株式会社コーセー、株式会社宗家源吉兆庵、株式会社サイバーエージェント、株式会社ゼンショーホールディングス、株式会社ツムラ、株式会社東洋新薬、株式会社日本取引所グループ、株式会社バンテック、株式会社リクルートキャリア、キリン株式会社、クミアイ化学工業株式会社、サッポロビール株式会社、サントリーホールディングス株式会社、スカパー JSAT 株式会社、住化農業資材株式会社、住友商事株式会社、第一三共株式会社、東レ株式会社、日産化学工業株式会社、ニッセイ情報テクノロジー株式会社、日東富士製粉株式会社、日本航空株式会社、日本コルマー株式会社、日本製粉株式会社、日本たばこ産業株式会社、ハウス食品株式会社、マリンフーズ株式会社、森永製菓株式会社、森永乳業株式会社、山崎製パン株式会社、雪印メグミルク株式会社他

森林科学専攻

東京都、株式会社高島屋、住友林業株式会社、吉本興業株式会社 他

水圏生物科学専攻

厚生労働省、国立大学法人新潟大学、神奈川県、地方独立行政法人北海道立総合研究機構、味の素株式会社、株式会社構造計画研究所、株式会社ジャパンネット銀行、株式会社 DeNA トラベル、株式会社デンソー、株式会社東洋新薬、株式会社リコー、双日株式会社、WDB エウレカ株式会社、DIC 株式会社、鉄道情報システム株式会社、日東紡績株式会社、野村證券株式会社、長谷川香料株式会社、パナソニックエコシステムズ株式会社、三井物産株式会社、焼津水産化学工業株式会社、楽天株式会社、Uva Wellassa University 他

農業・資源経済学専攻

農林水産省、東京都、楽天株式会社 他

生物・環境工学専攻

鹿児島県、株式会社安藤・間、株式会社イトクロ、日清食品株式会社、ニトリ株式会社、ヤンマーホールディングス株式会社 他

生物材料科学専攻

国立研究開発法人森林研究・整備機構、一般財団法人ベターリビング、一級建築士事務所 村田龍馬設計所、株式会社アサンテ、株式会社オープンハウス・ディベロップメント、株式会社クラレ、株式会社資生堂、株式会社ジャム構造設計、株式会社竹中工務店、株式会社日本設計、実教出版株式会社、数研出版株式会社、住友林業株式会社、日東紡績株式会社、日本製紙株式会社、日本ペイントホールディングス株式会社 他

応用生命工学専攻

国立研究開発法人新エネルギー・産業技術総合開発機構、国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構、鹿児島県、全国農業協同組合連合会、学校法人カリタス学園カリタス女子中学高等学校、EY アドバイザリー・アンド・コンサルティング株式会社、アサヒビール株式会社、味の素株式会社、花王株式会社、株式会社朝日ネット、株式会社医学書院、株式会社デンソー、株式会社電通、株式会社日本総合研究所、株式会社三井住友銀行、株式会社ヤッホーブルーイング、株式会社ランドマーク、キリン株式会社、協和発酵バイオ株式会社、サッポロビール株式会社、第一生命保険株式会社、高梨乳業株式会社、日本ハム株式会社、パナソニック株式会社、ヒゲタ醤油株式会社、不二製油株式会社、ボストン・コンサルティング・グループ、丸紅株式会社、三菱商事株式会社、雪印メグミルク株式会社 他

応用動物科学専攻

農林水産省、特許庁、独立行政法人国際協力機構、一般社団法人共同通信社、旭化成株式会社、味の素株式会社、大塚製薬株式会社、花王株式会社、株式会社インソース、株式会社資生堂、株式会社ゼンショーホールディングス、興和株式会社、J P モルガン、理研ビタミン株式会社 他

農学国際専攻

農林水産省、外務省、国立大学法人東京大学、独立行政法人日本貿易振興機構、東京都、アウトロックコンサルティング株式会社、アクセンチュア株式会社、アサヒビール株式会社、株式会社 SRA、株式会社オースビー、株式会社国際協力銀行、株式会社日本農業新聞、株式会社ビジブル、株式会社三祐コンサルタンツ、株式会社リクルートホールディングス、株式会社 LITALICO、加茂川啓明電機株式会社、京都機械工具株式会社、サントリー食品インターナショナル株式会社、デロイト トーマツ コンサルティング合同会社、長瀬産業株式会社、日本工営株式会社、日本テレビ放送網株式会社、ユニ・チャーム株式会社、Herat University 他

水圏システム学専攻

林野庁、公益財団法人日本野鳥の会、高知県立牧野植物園、味の素株式会社、王子マネジメントオフィス株式会社、株式会社ウチダレック、株式会社東京建設コンサルタンツ、株式会社日立コンサルティング、キリン株式会社、大成建設株式会社 他

大学院修了者 博士（満期退学者を含む）

生産・環境生物学専攻

国立大学法人東京大学、学校法人龍谷大学、株式会社ヤッホーブルーイング 他

応用生命化学専攻

国立大学法人東京大学、出光興産株式会社、株式会社エヌアイディ、株式会社サービシク、新日鐵住金株式会社、シンプレクス株式会社、長谷川香料株式会社、Ateneo de Manila University 他

森林科学専攻

公益財団法人日本交通公社、University of Sri Jayawardanapura 他

水圏生物科学専攻

国立大学法人東京大学、国立研究開発法人水産研究・教育機構、パナソニック システムソリューションズジャパン株式会社 他

農業・資源経済学専攻

学校法人神奈川大学 他

生物材料科学専攻

国立大学法人東京大学、公益財団法人日本住宅・木材技術センター、王子ホールディングス株式会社、他

応用生命工学専攻

国立研究開発法人理化学研究所、次世代天然物化学技術研究組合、学校法人早稲田大学早稲田大学高等学院・中学部、エムスリー株式会社、株式会社カネカ 他

応用動物科学専攻

株式会社ワークスアプリケーションズ、第一三共株式会社 他

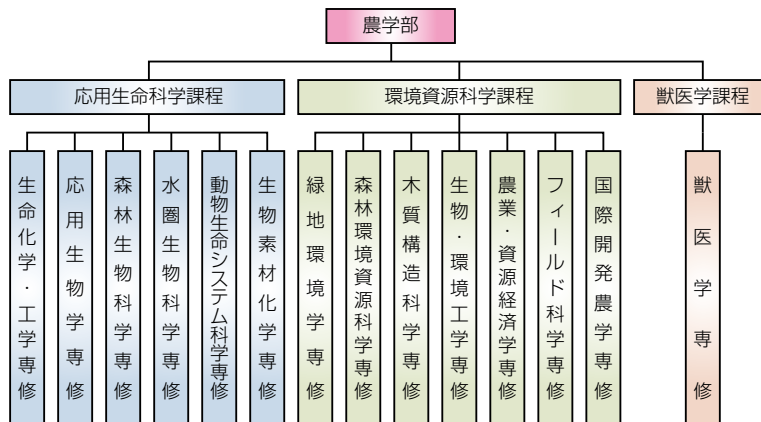
農学国際専攻

国立大学法人東京大学、独立行政法人国立科学博物館、公益財団法人国際緑化推進センター、株式会社野村総合研究所 他

獣医学専攻

国立研究開発法人国立国際医療研究センター、国立研究開発法人理化学研究所、独立行政法人医薬品医療機器総合機構、千葉県農業共済組合連合会、塩野義製薬株式会社、株式会社丹靑社、ノバルティスファーマ株式会社 他

(1) 学部教育



① 農学部のめざす教育

人類は人口の増加の一方でエネルギー・食糧資源供給に限界の見える時代を迎え、特に食糧と環境をめぐってさまざまな問題に直面している。農学部は、農学を構成する応用諸科学に関する専門教育を段階的・体系的に行い、食糧・資源・環境等の問題の解決に必要な高度の専門知識と幅広い視野を有し、社会・文化・産業活動を通じて地球社会の要請に応えることのできる洞察力・実践力・指導力を備えた人材を育成する。

② 課程・専修制

農学部では平成6年度にそれまでの学科制を廃止し、5課程19専修からなる課程・専修制を導入した。この制度は学生のカリキュラム選択に自由度を確保するとともに、段階的・体系的に専門性を高めていく方式によって、高度化する農学教育の要請に応えることをねらいとしている。現代の農学は専門領域への分化が進み、新しい専門領域も生まれているが、理想的な学部教育を実現するため、過度な細分化はせずに、現在は3課程14専修で運営されている。

課程・専修制では、学生は学部・課程・専修という三層の構造のもとで学習し、進学内定後の2A1、2A2には全ての農学部生に開かれた農学総合科目と、農学分野の基礎を学ぶ農学基礎科目を中心に履修することになる。農学総合科目は広い視野から問題関心の醸成をはかるオムニバス形式の講義であり、農学部独特のカリキュラムとなっている。本郷に進学後は課程専門科目、農学共通科目および専修専門科目を学ぶことになる。課程専門科目は専門性が格段に高まる点で農学基礎科目とは異なっている。農学共通科目では専門家としての倫理と安全管理を学ぶ。専修専門科目は実験・実習・演習科目で、基本的に必修となっている。4年次（獣医学専修では6年次）には、研究室に所属して卒業研究に取り組むことになる。

カリキュラムの内容は、平成27年度から4ターム制への移行に併せて、様々な見直しを行った。農学の基礎から応用までを段階的に広く深く学べるように科目区分の改訂を行った。平成28年度進学者から適用された新カリキュラムにおいては卒業に要する単位数を84単位から76単位に削減したことにより、予習復習を行う時間を確保させて、自発的な学びの深化を促すこととした。農学部では、SPタームやWタームでのカリキュラムに独自の工夫を凝らしている。これによって、専門的な実験・実習に一定期間集中的に取り組みたり、海外のサマープログラムへの積極的な参加が可能になったりするなど、学生に効果的な学修の機会を提供できるようになった。また、すべての専修の学生が必修科目として農学リテラシーを学ぶことになっており、それに加えて専門分野にあわせた安全・倫理面の講義を受講している。これらカリキュラム変更や教員の授業の改善では、学生による授業評価を積極的に活用している。

③ フィールド科学の教育

農学部では授業に占める演習、実験、実習等の割合がもともと高いが、特にフィールドワーク（野外実習）を重視しており、これが他学部にはみられない特色となっている。生態調和農学機構、演習林、水産実験所、牧場などの附属施設のみならず、学外の様々な施設と提携して、実践的な演習の充実を図っている。一部の専修では海外における実習も行っており、グローバルな視野に立つ人材育成をめざしている。

(a)農学部での授業科目名

農学総合科目			
人口と食糧	生態系の中の人類	土壌圏の科学	水の環境科学
環境と景観の生物学	生物の多様性と進化	環境と生物の情報科学	化合物の多様性と生理機能 I
化合物の多様性と生理機能 II	バイオマス利用学概論	森林資源と木材利用	食の安全科学
放射線環境学			
農学基礎科目			
基礎有機化学	基礎分析化学	基礎微生物学	分子生物学
基礎生物化学	生物統計学	植物生理学	細胞生物学
遺伝学	植物分類・形態学	昆虫学	動物生態学
森林環境科学汎論	動物分類学	応用物理学	植物生態学
木質構造科学概論	流れ学	情報工学	基礎高分子化学
基礎物理化学	農業資源経済学汎論	農業史概論	ミクロ経済学
動物生理学	応用動物科学概論		
農学共通科目			
農学リテラシー	環境倫理	生命倫理	技術倫理
農学展開科目			
食と人間	食と健康システム演習	農業環境の放射線影響	Radioecology and agricultural radioactivity
バイオマス利用研究特論	バイオインフォマティクス	フードクリエーションサイエンス	フロンティアライフサイエンス
生態統計学	サイエンスコミュニケーション	サイエンスコミュニケーション演習	自然再生事業モニタリング実習
Advances in Environmental and Agricultural Water Management in China			
課程専門科目	応用生命科学課程専門科目		
農芸化学概論	分析化学	生物無機化学	環境土壌学
土壌生態学	植物栄養学	植物分子生理学	有機化学
生物制御化学	生物有機化学	微生物生理学	細胞微生物学
微生物遺伝学	応用微生物学	微生物生態学	生物情報科学 I
生物情報科学 II	タンパク質・酵素学 I	タンパク質・酵素学 II	生物化学
動物細胞生物学	栄養化学	食品化学	食品生化学
食品・生物機能化学	環境科学	天然物有機化学	発酵工学
食品微生物学	食品生物構造学	食品免疫・腸管機能学	栽培植物学
植物病理学	耕地生態学	作物学 I	昆虫遺伝学
植物育種学	バイオメトリックス	園芸学 I	持続的植物生産学
雑草学	園芸学 II	植物分子育種学	作物学 II
昆虫生理学	昆虫系統分類学	環境微生物学	植物分子遺伝学
ストレス生物学	保全生態学	昆虫病理学	栽培学
昆虫利用学	植物ウイルス学	菌類学	植物細菌学
昆虫生態学	農業気象学	造林学	森林植物学
森林動物学	森林土壌学	森林遺伝育種学	森林生態生理学
森林生態学	樹木学	樹木医学	集団遺伝学
野生動物管理論	森林水文学	自然保護論	アジア生物環境学
森林生態圏管理論	自然環境学汎論	森林保全学	森林風景計画学
森林経理学	森林政策学	森林利用学	水生脊椎動物学
水生無脊椎動物学	水圏環境科学	水生生物化学	水生動物生理学
水圏生物工学	水圏天然物化学	魚類発生学	魚類遺伝育種学
浮遊生物学	水産食品科学	水生植物学	水生動物栄養学

課程専門科目	応用生命科学課程専門科目 (続き)		
漁業学	生物海洋学	水産資源学	水産増養殖学
海洋生態学	魚病学	ヒトと動物の関係学	応用遺伝学
応用免疫学	動物細胞制御学	動物細胞生化学 I	動物細胞生化学 II
動物行動学	動物生命システム科学 I	動物生命システム科学 II	組織学
発生学	獣医解剖学	神経生理学	内分泌・代謝生理学
体液生理学	環境衛生学	薬理学総論	実験動物学
臨床栄養学総論	臨床栄養学各論	生物多様性科学	生殖生物学
動物生命科学基礎	放射線動物科学	生物素材化学概論	森林生物化学
植物バイオマス化学 I	植物バイオマス化学 II	バイオマス生物学	木材化学
高分子材料学 I	高分子材料学 II	生体高分子科学	生物材料組織学
セルロース科学	有機反応機構	バイオマスエネルギー工学	植物繊維科学
界面科学	木材物理学	材料強度学	木質材料学 I

課程専門科目	環境資源科学課程専門科目		
ランドスケープエコロジー	自然共生社会論	園芸学 I	耕地生態学
森林風景計画学	森林植物学	樹木学	森園管理学
保全生態学	緑地計画学	緑化学	都市農村計画学
ストレス生物学	森林生態学	自然環境学汎論	自然保護論
森林リモートセンシング	農村計画学	生物多様性科学	リモートセンシング情報解析学
森林生態圏管理学	アジア生物環境学	景観解析	沿岸環境動態論
昆虫生態学	農業気象学	持続的植物生産学	雑草学
レクリエーション計画論	森林社会学	国際農業プロジェクト論	森林保全学
森林経理学	森林政策学	森林利用学	森林土壌学
森林遺伝育種学	森林水文学	砂防工学	森林資源経済学
国際森林学	森林土文学	森林生産工学	森林計測学
造林学	森林動物学	森林環境経済学	森林評価学
生物海洋学	水産資源学	構造力学	木材物理学
材料強度学	生物材料組織学	木質材料学 I	木質材料学 II
木質構造学	住宅計画論	高分子材料学 I	高分子材料学 II
建築住環境学	バイオメトリックス	木材化学	建築設計製図 I
建築設計製図 II	建築法規	建築生産施工	土壌物理学
ポストハーベスト工学	制御工学	農地環境工学	水利環境工学
環境地水学	生物環境工学	生物機械工学	測量学
水理学	水文学	水工システム学	土質力学
農業基盤計画学	生体計測情報学	生物環境情報工学	水処理工学
植物環境システム学	バイオマスエネルギー工学	材料力学	熱物質移動現象論
生物プロセス工学	生物環境要素学	生物・環境熱力学	農業経営概論
ゲーム理論基礎	農業経済学	マクロ経済学	農政学
農業史	農業経営学	政治経済学	数量経済分析
比較農業政策論	開発経済学	フードシステム論	農村開発論
応用数量経済分析	国際農業経済論	比較農業法	農村社会学
地域農業マネジメント	協同組合論	地域社会概論	海外農業研究
国際農業生態学	国際森林環境学	国際植物利用学	国際水産開発学
国際農業工学	国際動物資源科学	環境経済学	環境生物化学
国際地域農業開発と生産者組織			

課程専門科目	獣医学課程		
ヒトと動物の関係学	組織学	発生学	獣医解剖学
神経生理学	内分泌・代謝生理学	体液生理学	環境衛生学
薬理学総論	細胞情報薬理学	薬理学各論	動物細胞生化学Ⅰ
動物細胞生化学Ⅱ	細菌学	ウイルス学	実験動物学
応用遺伝学	応用免疫学	動物行動学	臨床栄養学総論
臨床栄養学各論	食品衛生学	寄生虫学	動物感染症学
病理学総論	毒性学	人獣共通感染症学	公衆衛生学総論
獣医衛生学	生殖生物学	魚病学	内科学総論
呼吸循環器病学	消化器病学	肝臓病学	泌尿器病学
内分泌病学Ⅱ	臨床病理学総論	内分泌病学Ⅰ	獣医法規
外科学・手術学総論	眼科学	麻酔・鎮痛学	画像診断学
臨床繁殖学	家禽疾病学	病理学各論	外科消化器病学
外科泌尿生殖器病学	外科呼吸器循環器病学	外科軟部組織病学	獣医疫学
神経病学	血液病学	皮膚病学	感染症・エキゾチックアニマル病学
運動器病学	神経外科学	馬臨床学	産業動物臨床学Ⅰ
産業動物臨床学Ⅱ	産業動物臨床学Ⅲ	臨床薬理学	臨床行動学
野生動物医学	科学プレゼンテーション	獣医倫理・動物福祉学	放射線生物学
医療面接・コミュニケーション	科学英語		

専修専門科目	応用生命科学課程		
--------	----------	--	--

生命化学・工学専修			
-----------	--	--	--

応用物理工学実験	応用環境科学実験	応用微生物学実験	応用生物化学実験
生命化学・工学実習			

応用生物学専修			
---------	--	--	--

応用生物学基礎実験Ⅰ	応用生物学基礎実験Ⅱ	フィールド農学基礎実習	フィールド農学応用実習
農家実習	応用生物学専門実験	応用生物学研究演習	

森林生物科学専修			
----------	--	--	--

造林学実験	森林植物学実験	森林動物学実験	森林風景計画実習
森林政策学演習	森林利用学実習	森林科学総合実習	測量学実習
環境設計演習	森林保全学実習	森林経営学実習	森林土壌学実験

水圏生物科学専修			
----------	--	--	--

水圏生物科学実験Ⅰ	水圏生物科学実験Ⅱ	水圏生物科学実験Ⅲ	水圏生物科学実験Ⅳ
水圏生物科学実習	漁業学実習	水産実習	

動物生命システム科学専修			
--------------	--	--	--

動物生命システム科学実習Ⅰ	動物生命システム科学実習Ⅱ	動物生命システム科学実習Ⅲ	動物生命・形態学実習
動物生命・牧場実習	動物生命システム科学実習Ⅳ	動物生命システム科学実習Ⅴ	動物生命システム科学実習Ⅵ
動物生命システム科学演習			

生物素材化学専修			
----------	--	--	--

生物材料生物学実験	生物材料化学実験	生物材料物理学実験	生物素材化学実験Ⅰ
生物素材化学実験Ⅱ	バイオマス科学実習	生物素材化学実習	生物素材化学演習

専修専門科目	環境資源科学課程		
--------	----------	--	--

緑地環境学専修			
---------	--	--	--

緑地デザイン実習	ランドスケープエコロジー実習	緑地環境実地実習	保全生態学実習
----------	----------------	----------	---------

応用生物学基礎実験Ⅰ 緑地環境学研究演習

森林環境資源科学専修

造林学実験	森林植物学実験	森林動物学実験	森林風景計画実習
森林政策学演習	森林利用学実習	森林科学総合実習	測量学実習
森林保全学実習	森林経営学実習	森林土壌学実験	環境設計演習

木質構造科学専修

生物材料生物学実験	木質構造科学実験	生物材料物理学実験	生物材料化学実験
森林科学実習	木質構造科学実習	建築設計製図Ⅲ	建築設計製図演習Ⅰ
建築設計製図演習Ⅱ	木質構造科学演習		

生物・環境工学専修

応用解析および演習Ⅰ	生物・環境工学実験Ⅰ	生物・環境工学実験Ⅱ	生物・環境工学実験Ⅲ
応用解析および演習Ⅱ	情報処理演習	水理学演習	生物環境工学演習
測量・空間情報解析実習	機械設計及び製図	生物・環境工学フィールドワーク	生物・環境工学実習

農業・資源経済学専修

農村調査概論	農業・資源経済学演習Ⅰ	農業・資源経済学演習Ⅱ	農業・資源経済学演習Ⅲ
農作業実習	地域経済フィールドワーク実習	農業・資源経済学研究演習	

フィールド科学専修

生物多様性科学実習	保全生態学実習	ランドスケープエコロジー実習	森圏管理学実習
沿岸生態学実習	森林科学総合実習	フィールド科学演習	

国際開発農学専修

国際農学情報処理演習	農場実習	森林実習	臨海実習
牧場実習	英語表現法	国際農学実験・実習Ⅰ	国際農学実験・実習Ⅱ
海外実習	ISAD Soil Fertility Management	ISAD Crop Modeling	ISAD Food Resources
ISAD Economics	ISAD Summer Crop Management	ISAD Winter Crop Management	国際開発農学概論

専修専門科目

獣医学課程

獣医学専修

組織学実習	解剖学実習	生体機能学実習	細菌学実習
食品衛生学実習	ウイルス学・免疫学実習	実験動物学実習	獣医学基礎実習
獣医公衆衛生学実習	寄生虫学実習	病理学実習	基礎臨床学実習Ⅰ
動物衛生学実習	基礎臨床学実習Ⅱ	毒性学実習	基礎臨床学実習Ⅲ
大動物臨床・臨床繁殖実習	総合臨床学インターンシップ	応用獣医学インターンシップ	小動物内科臨床実習
小動物外科臨床実習			

(b)教養学部での授業科目名 (2017年度開講)

総合科目D (人間・環境)

環境と生物資源～生物多様性と保全～、～農学フィールドワーク論～ 水と土の環境科学～食をささえる水と土の環境科学～
 食糧と環境～海洋生物資源の特性と利用～、～農業生産学概論～ 放射線環境科学～放射線農業影響学～
 森林環境資源学～ダムと森林、森と癒し、森の最終形～ 住環境の科学～人と木と木造建築～

総合科目E (物質・生命)

微生物の科学～微生物のバイオテクノロジー～、～微生物の世界～ 食の科学～食の生命科学～
 植物医科学～植物医科学概論～ 天然物の科学～生命を支える天然化合物～
 アグリバイオロジー～植物の機能とその利用～ 生物素材の科学～バイオマスの科学～
 応用動物科学Ⅰ～動物生命科学へのいざない～ 森の生物学～共存する森林生物～
 応用動物科学Ⅱ～高等動物の比較生物学～ 海の生命科学～海洋生物の生命科学～

総合科目F (数理・情報)

統計分析～生物統計分析～

全学自由研究ゼミナール

昆虫と節足動物の生物学	昆虫ゲノム解析の最先端	農作物を知る
伊豆に学ぶプラスS1	伊豆に学ぶプラスS2	伊豆に学ぶプラスA1
伊豆に学ぶプラスA2	古典落語から知る江戸の自然・文化	動物細胞研究法入門
ワンパクなタンパク質を科学する：実習編		

全学体験ゼミナール

危険生物の知識 (春編)	危険生物の知識 (秋編)	房総の森と生業 (なりわい) を学ぶ
君はスギとヒノキのことを本当に知っているのか? (入門編)	雪の森林に学ぶ～北海道演習林	森に学ぶ (ふらの)
春の奥秩父を巡る	秋の奥秩父を巡る	森のエネルギーを使いこなす
癒しの森と地域社会 (夏)	癒しの森と地域社会 (冬)	人の手で造り管理される森林―林業・風景計画の視点から
森の魅力をマッピング～GPSを使ったオリジナル地図づくり～	ダムと土砂と海	都市の緑のインタープリター養成―子どもに伝える自然体験―
伊豆に学ぶ1	伊豆に学ぶ2	伊豆に学ぶ3
伊豆に学ぶ (夏) 1	伊豆に学ぶ (夏) 2	伊豆に学ぶ (夏) 3
企画系さらに伊豆に学ぶS1	企画系さらに伊豆に学ぶS2	企画系さらに伊豆に学ぶA1
企画系さらに伊豆に学ぶA2	伊豆に学ぶ―熱帯植物編―	附属牧場で「生」の体験をしよう
海の生命科学入門		

初年次ゼミナール理科

生物の多様性をはかる
 始原の微生物代謝を紐解く
 気候変動と食料生産
 昆虫の適応戦略について考える
 私たちの身近にあるワンパクなタンパク質を科学する
 水資源と植物資源から90億人の食を考える
 生きもののにぎわいはなぜ大事なのか?―フィールドサイエンスから考える生物多様性―
 医と食の境界領域に着目しつつ、各国の医療制度を比較する
 不老不死を生命科学で考える
 環境に優しいバイオ系・ナノ材料およびマクロ材料の科学
 農林業と社会の関わりについて考える
 遺伝子組換え・改変技術の現状と今後の問題について考える

(c)キーワードから見た農学部の教育・研究の取り組み
(1)持続可能な循環型社会の構築＝農学



私たち人間は、産業革命や技術革新を通して生活の質の向上を目指してきた。実際に生活は便利になり、人類は人口の増加を伴って発展してきたが、それに伴い、資源や食料問題、地球温暖化や異常気象などの環境問題、生活習慣病や感染症など、様々な問題が生じている。これら、個人レベルから地球レベルまで幅広い問題の多くは人類の営みによってつくられているわけだが、これらの負担を未来の世代に背負わせるのか？

農学とは、今後長きにわたり持続可能な循環型社会を構築する学問である。そこには、宇宙船地球号という考えのもと、我々人類だけではなく自然との調和・共生を通して、我々の衣食住に関する問題解決や質の向上を目指すという思いがある。つまり、地球のものを『使う』だけではなく、地球を『育てる』ことが農学の使命だと考える。

ここでは、持続可能な循環型社会を構築する上で直面する諸問題を解決する農学部の取り組みについて、環境、食と健康、そして生物資源という3つの分野を紹介する。同じキーワードの中でも各専修で特色のある取り組みがあり、そしてこれら3つの分野がお互いに強く結びついていることが分かる。

(2) キーワード「環境」

農学部の「環境」＝自然や社会との共生を目指す



新たな国際協力・農業開発

- 持続的な農業・環境・資源利用技術を開発する
- 現地の人々の本質的ニーズをとらえる
- 異なる学問分野を学び俯瞰的な考え方を身につける
- 実践と観察から生きた知識を得る
- 学問と政策と実践をつなぐ総合力と創造力を養う



節水灌漑の水田調査 (インドネシア)



サンプリング方法の創意工夫中 (農場実習)



食料生産のための環境を守る

- 70億の人口を養う環境
- 安全・安心の食は環境から
- 環境を救う「植物力」
- 福島の農業を放射能から守る
- 海外に広がる数多くの研究フィールド
- 遺伝子、ゲノムから生態系まで多彩なアプローチ



アルカリ土壌地帯の植生回復 (中国)



水田の放射性セシウム調査 (福島)



森林の環境を知り、森林を守り育てる

- 森林の有する多様な機能
CO₂吸収、水源かん養、土砂災害防止、快適環境の形成、生物多様性の保全など
- 森林の荒廃や消失
人間活動の拡大、自然災害、病虫獣害など
- 森林を総合的に理解し、森林の保全、育成、持続的な利用に活かす



森林溪流における流量観測



ストレス下における樹木の生理状態の計測



海洋環境・生態系と人類の共存

- 海洋：生命誕生の場
多種多様な生物と生態系
地球最後のフロンティア
- 水圏における生物生産と物質循環過程の解明
- 水圏生態系の保全と利用
生態系サービスの享受
自然と人間のつき合い方
- 持続可能性の追求
地球の有限性と環境収容力
水産資源管理、生態系管理
- 地球的な視野をもって活躍できる人材の育成



学術研究船「白鳳丸」による調査航海



臨海実習での定置網揚げ



ウナギの卵とレプセファルス幼生



動物科学と環境

- 環境因子の動物への影響
- 昆虫が媒介する病気の制御
- 絶滅危惧動物の遺伝子維持
- 動物の多様性の維持
- 動物の進化
- 環境に応答した育種
- 細胞を取り巻く体内環境



病原体媒介昆虫の野外調査 (バングラデシュ)



マウス胚・胎子・胎盤解剖実習 (3年次)



健全でうるおいのある緑地環境を育む

- 多様なみどり空間
まちの緑から里山、森林から砂漠まで
- みどりがもつ多様な機能
生態系サービスと生物多様性
- 社会の変化とみどりの危機
気候変動、生物多様性の損失、乱開発・過剰利用、利用・管理の縮小...
- 2つのアプローチ
生態学(エコロジー)と
空間計画(プランニング)



農村ランドスケープの持続的な利用・管理



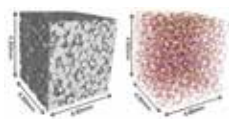
都市のみどりの多様な機能の解明

人と自然が調和した緑地環境＝「ランドスケープ」の形成を目指して！



農学と工学を融合し、環境を科学する

- 生物と環境をはかり解析する
ミクروسケール(細胞、土粒子)から
マクروسケール(地域、地球規模)まで
- 食と環境を科学し応用する
・物質循環、持続可能な農業
・ポストハーベスト、食の安全・安心
・農業ロボット、精密農業、植物工場
- 地域環境を考え地域をデザインする
・農業、農地の多面的機能
・グリーンイノベーション



CT画像から構築した土壌の3D構造



水田圃場での調査



環境保全の生態学—自然の中で科学する—

- 良好で持続的な生物環境や自然生態系の創出と保全
- 森林・里山・農村・都市・河川・海などの様々なフィールドにおける生物の多様性と生息環境との関係の解明
- 人間生活と環境・生態系とのかかわりに関する諸問題の解決



里山での生物・環境調査実習 (横浜市)



護岸建設で劣化したヨシ帯 (茨城県北浦)

魚類は著しく少なくなることがわかった

(3) キーワード「食・健康」

農学部「食・健康」＝地球の未来を救う第一歩

農学から見た「食・健康」

- 「生産」から「消費」まで
- 食糧資源の確保
- いかに「作る」か
いかに「食べる」か
- おいしく食べて健康に「健康寿命延伸」
- 食を通じた「グローバルスタンダード」。

食べものに関わる多様な分野
多様・ゲノム編集 生産技術 国産農林水産物
生産拡大 健康長寿社会 農業振興
健康寿命延伸 社会貢献
食事メニューの提案 商品開発 加工・流通

食料生産の新展開

- 食料生産の鍵は、
①作物の収量の向上
②病害虫の最適制御
- ゲノム情報の利用による生理的機能の改良
- 作物の遺伝的特徴と環境との関係の解明
- 広がる海外での研究展開

作物そのものの生産力を高める
作物の病気や害虫を制圧する

水産資源の利活用

- 動物性タンパク質源としての水産物
世界で15%、後発国では50%以上
- 食文化「和食」と「だし」
- 豊富な健康機能性

世界文化遺産「和食」と「だし」

地球と海の恵みの一部を無駄なく最後まで利用する

畜産資源の利活用

- 家畜の健康保持
- 繁殖効率の向上
- 生産性(肉質など)の改善
- 安全で安心な畜産食品
- 排泄物の有効活用
- 学問と政策と実践とをつなぐ総合力

畜産資源の安定供給

大動物実習(東大牧場)

健康・病気と食品

- 人口増加と食料不足
- 栄養不良と栄養過多
- 健康食品とサプリメント
- 食品(遺伝子組換え食品を含む)の安全と安心
- 生命活動の異常と病気
- 病気の予防と治療薬の開発
- 食品と飼料

世界の多くの地域では未だに食料・栄養不足

ヒトには栄養不足の食品、資源動物には有用な飼料

進化する食の流通

食の流通に関する近年の新技术

- 人手不足を解消する食の自動格付ロボット
- 非破壊診断による食の品質保証
- 密封包装による野菜中健康増進物質の増強(特許5401020号)

トマト中GABA(ストレス緩和物質)濃度

非破壊糖度センサー

食を支えるフードシステム

- 食のインフラの進化
 - 卸売市場と直売所
 - 表示・認証制度・トレーサビリティ
 - 食の信頼と科学の支援
- 消費者選好と行動の多様化
 - 倫理的消費
 - 原発事故と風評被害
 - 食育と食文化

パリのマルシェ 中央卸売市場@大田 直売実験@東大マルシェ アイ・トラッキング分析

微生物と食・健康

発酵・醸造に利用される微生物

麹菌 酵母 乳酸菌

微生物の働きにより、様々な味・機能性を生み出している

日本酒づくりをとおして 発酵・醸造における微生物の働きを学ぶ

微生物と腸管との相互作用

ビフィス菌 乳酸菌 大腸菌 腸内フローラ

農業を支える微生物

水田土壌には多くの種類の微生物がすみ、物質循環を司っている

(4) キーワード「生物資源」 農学部の「生物資源」＝持続可能な社会を担う

生物資源：動物

自然の恵み⇔育てる

- 自然の恵み
 - ・ 安全性・安定供給性
 - ・ 乱獲・生態系への影響
- 育てる
 - ・ 経済性(高付加価値化、生産性)
 - ・ 環境への影響(肥料、産業ゴミ)

食料⇔非食料

- 食料
 - ・ 畜産・漁業
 - ・ 安定供給性・競争力
- 非食料
 - ・ 鶏卵→ウイルス培養
 - ・ 昆虫→生物農薬、紡績
 - ・ 実験動物→医薬品



写真: 美迎詩織 (獣医繁殖育種学研究室)
ウシの繁殖率をあげるフェロモンの探索

スライド: 潮秀樹 (水産化学研究室)
新技術を駆使した水産物の出荷時期調節と高付加価値化

写真: 川本宗孝 (昆虫遺伝研究室)
無限の可能性を秘めたカイコによる物質生産

使役動物の感染症対策: 動物福祉と公衆衛生

生物資源：植物

資源の効率的な利用

- 食料として
 - ・ 農作物の生産性向上
 - ・ 過酷な環境でも栽培可能な植物の創出
- 非食料として
 - ・ バイオエネルギー
 - ・ 有用物質生産(医薬品など)

資源の効率的な利用

- 多様な資源
 - ・ 生態系サービス
 - ・ 野生植物の持つ遺伝資源
- 自然共生社会
 - ・ 生物多様性
 - ・ 里地里山・農村景観



写真提供: 植物分子生理学研究室
乾燥ストレス耐性を有する組換えイネ

写真提供: 生物機械工学研究室
ジャトロファからのバイオエネルギー生産

写真提供: 生物環境工学研究室
植物を利用したインフルエンザワクチン生産

写真: 緑地環境学専攻ウェアット
http://www.sophia.ac.jp/green/contents/soil/lyp/soil.html
農地・農村のデザインと農業生態系の保全

森林の生物資源

森林資源の現況調査

- 国連食糧農業機関 FAOの統計
- ・ 農業用地
- ・ 木材、特に燃料の必要性

熱帯林

- 地球環境問題
 - ・ 生物多様性: 遺伝子資源
 - ・ CO₂濃度
 - ・ 地域の森林問題

温帯林

- 里山保全

亜寒帯林(タイガ)

- もっと一つの大森林帯



世界の森林の現況

熱帯林

亜寒帯林

温帯林

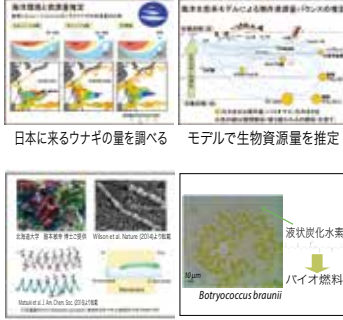
水圏(海・河川等)の生物資源

地球上の70%は水圏

- 多様な環境
- ・ 生物資源の多様性
- ・ 生物資源の莫大な生産性
- 未利用生物資源
 - ・ 食料としての可能性
 - ・ 食料以外の利用(医薬品・燃料等)

「海の恵み」は誰の物?

- 再生産可能(子孫が増える)資源
- ・ 適切な資源管理が必要
- ・ どう増やすか?



日本に来るウナギの量を調べる

モデルで生物資源量を推定

生物の中に棲む生物も貴重な生物資源

目に見えない薬も生物資源

生物学、化学、物理学、数学すべてが貢献

化石資源から生物資源へ

生物資源⇔化石資源

- 生物資源
 - ・ 衣・食・住の基盤
 - ・ 持続的に再生産しうる資源
- 化石資源
 - ・ もっと、快適で便利に
 - ・ 非循環型の枯渇資源

生物資源の高度利用へ

- 有機化学
- バイオテクノロジー
- 材料工学
 - ・ CO₂循環型プラスチック
 - ・ 液体燃料等エネルギー利用
 - ・ ナノマテリアル開発
 - ・ 高付加価値な薬品製造
 - ・ 電子デバイス部材 等々



環境にやさしいバイオプラスチック

木材細胞壁主要成分であるリグニンの模式構造

鋼鉄の5倍強いナノファイバー新素材

木や草を分解する酵素で未来社会に貢献

生物資源の利用法

木材を使って炭素を固定

- 建築構造物
 - ・ 新しい材料・接合法開発(木材の可能性)
 - ・ 木造らしい建築物(木を魅せる)
- 家具・内装材
 - ・ 快適性(木で心地良い空間に)
 - ・ 環境改善(吸放湿性、断熱性など)
- 土木的利用
 - ・ 木製ダム・木橋(意外と長持ち)
 - ・ ガードレール・遮音壁(見た目も穏やか)
- その他いろいろ
 - ・ 楽器(樹種が違うと音色も違う)
 - ・ 文具(香り・手触りの良さ)
 - ・ 玩具(子供への安全性) 等々

木を賢く使って、地球環境にも貢献!



大地震にも耐えられる新しい耐力壁を開発

木管楽器の音色はリードの材質・形で決まる?

木質空間の快適性評価とデッキ表面温度の比較

木質構造による美しい集積と五月祭2016で製作した木造展示物

微生物

食飼料を造る

- 真菌類(カビ・酵母)
- バクテリアなど

有用物質を造る

- 放線菌など

地球環境・生物環境を創る

- 微生物群集
- 独立栄養生物など

病気を引き起こす

- バクテリア
- ウイルス



写真提供: 微生物学研究室
味噌・醤油・酒などを造る麹菌

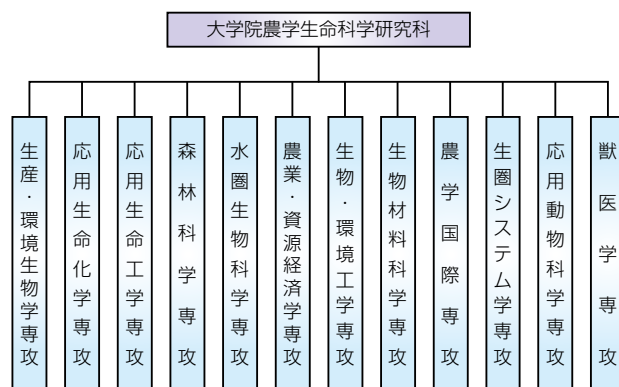
写真提供: 醸造学研究室
抗生物質などを造る放線菌

写真提供: 土壌微生物学研究室
水田土壌のサンプリング～脱窒微生物群の特定～

Standards in genomic sciences
二酸化炭素を固定する水素細菌



(2)大学院教育



我々の生活は、生物資源に依存している。農学生命科学は、植物や動物、微生物の生物機能を活用して、人類生存の基盤である生物資源の生産と環境の持続性に貢献するための学問分野である。世界人口の急激な増加が予測されているなか、安全な食料の供給と地球環境の保全が人類にとって最大の課題であり、その解決に向けた技術的基盤や社会的な対策を担う最も重要な研究分野として注目されている。大学院教育では、食料や環境に関する複雑かつ多様な課題に対して専門の立場から取り組める人材を育成することを目標にしている。そのために本研究科は、生産・環境生物学、応用生命化学、応用生命工学、森林科学、水圏生物科学、農業・資源経済学、生物・環境工学、生物材料科学、農学国際、生圏システム学、応用動物科学、獣医学（4年制博士課程）の12専攻を擁し、農林水畜産業の基盤となる生命科学や生態系管理のためのフィールド科学、社会制度や情報に関する人文・社会科学まで非常に幅広い教育研究が行われている。さらに、演習林や生態調和農学機構、牧場、水産実験所、動物医療センターなどの充実した附属施設が農林水畜産業の現場に即した教育研究を支えている。また、食の安全・安心に対する社会の要請に応える研究の推進を目的に食の安全研究センターが設置され、産学連携による研究が活発に行われている。修士課程では、講義、演習、修士論文研究を、博士課程では、主に演習、博士論文研究を通じて高度な専門性を身につける教育がなされている。その一方で、先端化、細分化した研究成果を統合し活用できる人材の育成を目的とした専攻横断的な教育プログラムも用意されている。たとえば、ゲノムをはじめ多種多様な生命情報の蓄積が急激に進むなか、それらを統合し活用できる人材育成のための教育プログラムとしてアグリバイオインフォマティクス教育研究ユニットが、学際的な研究交流を通して農学に関わる専門領域の相互理解を深めることを目的としたアグリコクーンが、それぞれ設置されている。

本研究科と交流協定のあるアジアを中心とした海外の大学の研究者を受け入れ、英語で博士課程の教育を行う「環境調和農学特別コース」を設置し、この修了者を通じた学術・研究交流の国際ネットワーク形成を目指している。また、平成22年度に修士課程から開始した英語で講義や研究指導等を行うプログラム（グローバル30）に、平成24年度から博士課程が設置され、本研究科における教育の国際化が着実に進展している。

平成29年4月の本研究科の入学者は、修士課程290名、博士課程95名で、そのうちアジアを中心とした留学生が81名含まれている。大学院修了者は、大学や研究所等の教育研究機関、官公庁、民間企業等に職を得て、常に社会の中核を担う存在になっている。本研究科は、時代の要請に応えられる人材を社会に輩出していくための努力を続けている。



弥生講堂アネックス



向ヶ岡ファカルティハウス
弥生キャンパス木質構造建築物（写真提供：生物材料科学専攻）



農正門

(a)大学院（修士課程）での授業科目名

生産・環境生物学専攻

作物学特論	園芸学特論	昆虫遺伝・発生生理学	昆虫ウイルス・細胞工学
育種学特論	栽培学特論	植物病理学特論	植物ウイルス学特論
植物細菌学特論	植物菌類学特論	生物測定学特論	植物分子遺伝学特論
昆虫学特論	総合有害生物管理学	生産生態学特論	生産・環境生物学特別講義
応用生物学特別実験Ⅰ	応用生物学特別実験Ⅱ	応用生物学演習Ⅰ	応用生物学演習Ⅱ
基礎生物学特別実験Ⅰ	基礎生物学特別実験Ⅱ	基礎生物学演習Ⅰ	基礎生物学演習Ⅱ
資源創成生物学特別実験Ⅰ	資源創成生物学特別実験Ⅱ	資源創成生物学演習Ⅰ	資源創成生物学演習Ⅱ
生産生態学特別実験Ⅰ	生産生態学特別実験Ⅱ	生産生態学演習Ⅰ	生産生態学演習Ⅱ

応用生命化学専攻

植物分子栄養学	生物機能開発化学	生命化学フロンティアⅠ	生命化学フロンティアⅡ
天然物構造解析法	有機合成化学	天然物生理化学	細胞調節生化学
環境土壌資源論	生物無機化学	動物生理化学	食品応用生化学
食品機能化学	食品物理化学	生理活性化学	ゲノムと生体情報の科学
正常と異常の生命科学	応用生命化学特別実験Ⅰ	応用生命化学特別実験Ⅱ	応用生命化学演習

応用生命工学専攻

情報生命工学	醗酵微生物学	分子育種学	生命工学フロンティアⅠ
生命工学フロンティアⅡ	生体触媒分子論	細胞遺伝学	微生物機能開発学
環境微生物学	醗酵醸造学	細胞機能工学	植物機能工学
応用生命工学特別実験Ⅰ	応用生命工学特別実験Ⅱ	応用生命工学演習	

森林科学専攻

森林生態社会学	基礎造林学	造林学特論	熱帯森林学
森林土壌学特論	森林植物学特論	環境植物学	樹病学
森林生態学特論	樹木生理学	森林昆虫学	土壌動物学
環境動物・倫理学	森林経理学特論	森林空間計画論	森林計測学特論
林政学	外国森林政策学	林業経済論	資源環境経済学
林業史	森林利用学特論	森林基盤整備計画論	森林生産工学特論
森林機械作業論	森林作業システム学	森林水文学特論	土砂水理学
砂防工学特論	森林環境物理学	環境緑化学	砂防・治山事業論
造園学特論	風致工学	森林レクリエーション論	環境設計特論
国際森林学特論	持続的森林圏経営論	森林生態圏管理学特論	森林圏生態学
森林圏生物動態学	生物多様性科学総論	森林圏管理システム学	森林流域管理学
森林圏水循環機能学	森林生物機能学	森林遺伝子機能開発学	森圏管理学
森林共生生物学	森林科学特別実験	森林科学特別演習	

水圏生物科学専攻

水圏生物生態解析法	水圏生命科学実験法	水圏環境計測法	海洋科学概論
生物海洋学総論	海洋生物学	海洋資源生態学	海産哺乳動物学
水産資源管理学	水産海洋学	水族遺伝育種学	魚類免疫学
魚病学特論	水族生理学特論	水圏生物システム学	水圏生物化学特論

水圏生物科学専攻 (続き)

水圏天然物化学特論	水圏生物工学特論	水圏生命科学特論	海洋生物資源利用論
水産資源学演習	水圏生物環境学演習	魚病学演習	水族生理学演習
水圏生物化学演習	水圏天然物化学演習	水圏生物工学演習	水圏生物システム学演習
プランクトン学演習	海洋微生物学演習	海洋資源解析学演習	海洋資源生態学演習
海洋環境動態学演習	海洋行動生態計測演習	海洋問題演習Ⅲ	水圏生物科学演習
水圏生物科学特別講義Ⅰ	水圏生物科学特別実験Ⅰ		

農業・資源経済学専攻

農業経営学特論Ⅰ (Farm ManagementⅠ)	農業経営学特論Ⅱ (Farm ManagementⅡ)	農業経営学特論Ⅲ (Farm ManagementⅢ)	農業経営学特論Ⅳ (Farm ManagementⅣ)
農業経営学特論Ⅴ (Farm ManagementⅤ)	農業経営学特論Ⅵ (Farm ManagementⅥ)	農業経営学特論Ⅶ (Farm ManagementⅦ)	農業経営学特論Ⅷ (Farm ManagementⅧ)
農業構造動態論Ⅰ (Trend of Agricultural StructureⅠ)	農業構造動態論Ⅱ (Trend of Agricultural StructureⅡ)	農業構造動態論Ⅲ (Trend of Agricultural StructureⅢ)	農業構造動態論Ⅳ (Trend of Agricultural StructureⅣ)
農業構造動態論Ⅴ (Trend of Agricultural StructureⅤ)	農業構造動態論Ⅵ (Trend of Agricultural StructureⅥ)	農業構造動態論Ⅶ (Trend of Agricultural StructureⅦ)	農業構造動態論Ⅷ (Trend of Agricultural StructureⅧ)
農業史特論Ⅰ (History of AgricultureⅠ)	農業史特論Ⅱ (History of AgricultureⅡ)	農業史特論Ⅲ (History of AgricultureⅢ)	農業史特論Ⅳ (History of AgricultureⅣ)
農業史特論Ⅴ (History of AgricultureⅤ)	農業史特論Ⅵ (History of AgricultureⅥ)	農業史特論Ⅶ (History of AgricultureⅦ)	農業史特論Ⅷ (History of AgricultureⅧ)
開発経済学特論Ⅰ (Development EconomicsⅠ)	開発経済学特論Ⅱ (Development EconomicsⅡ)	開発経済学特論Ⅲ (Development EconomicsⅢ)	開発経済学特論Ⅳ (Development EconomicsⅣ)
開発経済学特論Ⅴ (Development EconomicsⅤ)	開発経済学特論Ⅵ (Development EconomicsⅥ)	開発経済学特論Ⅶ (Development EconomicsⅦ)	開発経済学特論Ⅷ (Development EconomicsⅧ)
資源・環境経済学特論Ⅰ (Resource and Environmental EconomicsⅠ)	資源・環境経済学特論Ⅱ (Resource and Environmental EconomicsⅡ)	資源・環境経済学特論Ⅲ (Resource and Environmental EconomicsⅢ)	資源・環境経済学特論Ⅳ (Resource and Environmental EconomicsⅣ)
資源・環境経済学特論Ⅴ (Resource and Environmental EconomicsⅤ)	資源・環境経済学特論Ⅵ (Resource and Environmental EconomicsⅥ)	資源・環境経済学特論Ⅶ (Resource and Environmental EconomicsⅦ)	資源・環境経済学特論Ⅷ (Resource and Environmental EconomicsⅧ)
国際農村開発学特論Ⅰ (International Rural DevelopmentⅠ)	国際農村開発学特論Ⅱ (International Rural DevelopmentⅡ)	国際農村開発学特論Ⅲ (International Rural DevelopmentⅢ)	国際農村開発学特論Ⅳ (International Rural DevelopmentⅣ)
国際農村開発学特論Ⅴ (International Rural DevelopmentⅤ)	国際農村開発学特論Ⅵ (International Rural DevelopmentⅥ)	国際農村開発学特論Ⅶ (International Rural DevelopmentⅦ)	国際農村開発学特論Ⅷ (International Rural DevelopmentⅧ)
汎アジア経済論Ⅰ (Pan-Asian EconomicsⅠ)	汎アジア経済論Ⅱ (Pan-Asian EconomicsⅡ)	汎アジア経済論Ⅲ (Pan-Asian EconomicsⅢ)	汎アジア経済論Ⅳ (Pan-Asian EconomicsⅣ)
汎アジア経済論Ⅴ (Pan-Asian EconomicsⅤ)	汎アジア経済論Ⅵ (Pan-Asian EconomicsⅥ)	汎アジア経済論Ⅶ (Pan-Asian EconomicsⅦ)	汎アジア経済論Ⅷ (Pan-Asian EconomicsⅧ)
農業・資源経済学特別講義Ⅰ (Special Lectures in Agricultural and Resource EconomicsⅠ)	農業・資源経済学特別講義Ⅱ (Special Lectures in Agricultural and Resource EconomicsⅡ)	農業・資源経済学特別講義Ⅲ (Special Lectures in Agricultural and Resource EconomicsⅢ)	農業・資源経済学特別講義Ⅳ (Special Lectures in Agricultural and Resource EconomicsⅣ)
農業・資源経済学特別講義A (Special Lectures in Agricultural and Resource Economics A)	農業・資源経済学特別講義B (Special Lectures in Agricultural and Resource Economics B)	外国農業特論 (Special Lecture on foreign agriculture)	農業経営学演習Ⅰ (Seminar in Farm ManagementⅠ)
農業経営学演習Ⅱ (Seminar in Farm ManagementⅡ)	農業経営学演習Ⅲ (Seminar in Farm ManagementⅢ)	農業経営学演習Ⅳ (Seminar in Farm ManagementⅣ)	農業経営学演習Ⅴ (Seminar in Farm ManagementⅤ)
農業経営学演習Ⅵ (Seminar in Farm ManagementⅥ)	農業経営学演習Ⅶ (Seminar in Farm ManagementⅦ)	農業経営学演習Ⅷ (Seminar in Farm ManagementⅧ)	農業構造動態論演習Ⅰ (Seminar in Trend of Agricultural StructureⅠ)
農業構造動態論演習Ⅱ (Seminar in Trend of Agricultural StructureⅡ)	農業構造動態論演習Ⅲ (Seminar in Trend of Agricultural StructureⅢ)	農業構造動態論演習Ⅳ (Seminar in Trend of Agricultural StructureⅣ)	農業構造動態論演習Ⅴ (Seminar in Trend of Agricultural StructureⅤ)
農業構造動態論演習Ⅵ (Seminar in Trend of Agricultural StructureⅥ)	農業構造動態論演習Ⅶ (Seminar in Trend of Agricultural StructureⅦ)	農業構造動態論演習Ⅷ (Seminar in Trend of Agricultural StructureⅧ)	農業史演習Ⅰ (Seminar in History of AgricultureⅠ)
農業史演習Ⅱ (Seminar in History of AgricultureⅡ)	農業史演習Ⅲ (Seminar in History of AgricultureⅢ)	農業史演習Ⅳ (Seminar in History of AgricultureⅣ)	農業史演習Ⅴ (Seminar in History of AgricultureⅤ)
農業史演習Ⅵ (Seminar in History of AgricultureⅥ)	農業史演習Ⅶ (Seminar in History of AgricultureⅦ)	農業史演習Ⅷ (Seminar in History of AgricultureⅧ)	開発経済学演習Ⅰ (Seminar in Development EconomicsⅠ)
開発経済学演習Ⅱ (Seminar in Development EconomicsⅡ)	開発経済学演習Ⅲ (Seminar in Development EconomicsⅢ)	開発経済学演習Ⅳ (Seminar in Development EconomicsⅣ)	開発経済学演習Ⅴ (Seminar in Development EconomicsⅤ)
開発経済学演習Ⅵ (Seminar in Development EconomicsⅥ)	開発経済学演習Ⅶ (Seminar in Development EconomicsⅦ)	開発経済学演習Ⅷ (Seminar in Development EconomicsⅧ)	資源・環境経済学演習Ⅰ (Seminar in Resource and Environmental EconomicsⅠ)
資源・環境経済学演習Ⅱ (Seminar in Resource and Environmental EconomicsⅡ)	資源・環境経済学演習Ⅲ (Seminar in Resource and Environmental EconomicsⅢ)	資源・環境経済学演習Ⅳ (Seminar in Resource and Environmental EconomicsⅣ)	資源・環境経済学演習Ⅴ (Seminar in Resource and Environmental EconomicsⅤ)
資源・環境経済学演習Ⅵ (Seminar in Resource and Environmental EconomicsⅥ)	資源・環境経済学演習Ⅶ (Seminar in Resource and Environmental EconomicsⅦ)	資源・環境経済学演習Ⅷ (Seminar in Resource and Environmental EconomicsⅧ)	国際農村開発学演習Ⅰ (Seminar in International Rural DevelopmentⅠ)
国際農村開発学演習Ⅱ (Seminar in International Rural DevelopmentⅡ)	国際農村開発学演習Ⅲ (Seminar in International Rural DevelopmentⅢ)	国際農村開発学演習Ⅳ (Seminar in International Rural DevelopmentⅣ)	国際農村開発学演習Ⅴ (Seminar in International Rural DevelopmentⅤ)

農業・資源経済学専攻（続き）

国際農村開発学演習Ⅵ (Seminar in International Rural Development Ⅵ)	国際農村開発学演習Ⅶ (Seminar in International Rural Development Ⅶ)	国際農村開発学演習Ⅷ (Seminar in International Rural Development Ⅷ)	汎アジア経済論演習Ⅰ (Seminar in Pan-Asian Economics Ⅰ)
汎アジア経済論演習Ⅱ (Seminar in Pan-Asian Economics Ⅱ)	汎アジア経済論演習Ⅲ (Seminar in Pan-Asian Economics Ⅲ)	汎アジア経済論演習Ⅳ (Seminar in Pan-Asian Economics Ⅳ)	汎アジア経済論演習Ⅴ (Seminar in Pan-Asian Economics Ⅴ)
汎アジア経済論演習Ⅵ (Seminar in Pan-Asian Economics Ⅵ)	汎アジア経済論演習Ⅶ (Seminar in Pan-Asian Economics Ⅶ)	汎アジア経済論演習Ⅷ (Seminar in Pan-Asian Economics Ⅷ)	

生物・環境工学専攻

生体計測情報学特論	生物環境基礎工学	生物環境情報工学特論Ⅰ	生物環境情報工学特論Ⅱ
農地環境工学特論	農地管理工学特論	水理学特論	水利環境工学特論
土壌物理学特論	環境地水学特論	地域環境工学特論Ⅰ	地域環境工学特論Ⅱ
生物環境調節学	生物環境工学特論	生物機械工学特論	生物物性学特論
生物加工システム工学	生物プロセス工学特論	生物システム工学特論Ⅰ	生物システム工学特論Ⅱ
エコロジカル・セイフティー学特論Ⅰ	エコロジカル・セイフティー学特論Ⅱ	生物・環境工学特別研究Ⅰ	生物・環境工学実験実習
生物・環境工学演習			

生物材料科学専攻

生物素材科学特論	セルロース科学特論Ⅰ	セルロース科学特論Ⅱ	木造建築特論
木材乾燥学特論	木材物理学特論Ⅰ	木材物理学特論Ⅱ	木質建築学特論
木質材料学特論	住環境学特論	材料・住科学特別講義Ⅰ	材料・住科学特別講義Ⅱ
木材保存学特論	森林生物化学特論Ⅰ	森林生物化学特論Ⅱ	木材化学特論Ⅰ
木材化学特論Ⅱ	高分子材料科学特論Ⅰ	高分子材料科学特論Ⅱ	バイオマス化学特別講義Ⅰ
バイオマス化学特別講義Ⅱ	バイオマス化学特別講義Ⅲ	バイオマス化学特別講義Ⅳ	生物材料科学特別実験Ⅰ
生物材料科学演習			

生物材料科学専攻（木造建築コース）

木質構造学特論	木質材料学特論	木材保存学特論	木材資源論
基礎木材学	住環境学特論	木材加工学特論	建築生産特論
建築事例研究	建築設計製図特論	木造建築特論	構造解析特論
建築材料学特論	木質構造設計論	建築関連規格と法規	木造建築設計演習
建築事例研究実習	木造建築実験		

農学国際専攻

国際水産開発学総論	国際水産開発学特論	国際水産開発学演習	国際動物資源開発学
国際動物機能開発学	国際動物資源学演習	国際動物生産学実験	国際植物資源学
植物資源管理学	国際植物資源学演習	地域資源利用システム学	国際植物材料学
国際植物材料学演習	植物新機能化学	植物機能開発工学	新機能植物開発学演習
国際植物生産学実験	国際森林資源学特論	国際森林環境学特論	国際森林環境学演習
地球生物環境学実験	国際環境評価学特論	国際環境管理学特論	国際環境経済学演習
国際環境経済学研究	国際環境資源情報学特論	国際情報農学特論	国際情報農学演習
国際情報農学実験	国際農業開発学演習	国際農業開発学実験	農学国際特論Ⅰ
農学国際特論Ⅱ	農学国際特論Ⅲ	農学国際演習	農学国際実験・研究
農学国際実地研究Ⅰ	国際農学英語Ⅰ	国際農学英語Ⅱ	海外研究協力論

農学国際専攻（国際農業開発学コース）

International Program in Agricultural Development Studies (IPADS)

国際農業開発学特論 (IPADS Development Studies)	国際農業開発学各論 (IPADS Case Studies)	国際食料資源学 (IPADS Food Resources)	国際作物モデル学 (IPADS Crop Modeling)
--	-----------------------------------	-----------------------------------	-----------------------------------

農学国際専攻（国際農業開発学コース）（続き）

国際作物モデル特論 (IPADS Advanced Crop Modeling)	夏作物管理学 (IPADS Summer Crop Management)	冬作物管理学 (IPADS Winter Crop Management)	国際植物改良学 (IPADS Plant Improvement)
国際土壌肥沃度管理学 (IPADS Soil Fertility Management)	国際森林開発論 (International Forest Development)	国際森林認証論 (International Forest Certification)	森林昆虫生態学 (Forest Insect Ecology)
国際農業開発経済学 (IPADS Economics)	国際農業統計学 (IPADS Statistics)	国際沿岸生態学 (IPADS Coastal Ecology)	サステナビリティと作物生産学 (Sustainability and Crop Production)
国際農業開発学客員セミナー (IPADS Guest Seminars)	国際農業開発学セミナー (IPADS Research Seminars)	国際農業開発学研究 (IPADS Master's Research)	

生圏システム学専攻

フィールド科学総論	生圏システム学特論	生態統計学	生物多様性科学総論
生物多様性科学特論	生物多様性科学演習	保全生態学総論	保全生態学特論
保全生態学演習	緑地創成学特論	緑地管理学特論	緑地創成学演習
森圏管理学	相関森林学	森圏管理学演習	水域生態学
水域保全学	水域保全学演習	耕地生圏生態学	耕地生圏生態学演習
水圏生産システム学総論	水圏生産システム学特論	水圏生産システム学演習	森林圏生態学
森林圏生物動態学	森林圏生態学演習	森林生物機能学	森林遺伝子機能開発学
森林生物機能学演習	森林生態圏管理学特論	森林圏管理システム学	国際森林学特論
森林圏生態社会学演習	持続的森林圏経営論	森林流域管理学	森林圏水循環機能学
森林流域管理学演習	生圏システム学実験・研究		

応用動物科学専攻

動物科学トピックス	ゲノムと生体情報の科学	神経と行動の科学	動物・細胞の構造の科学
動物の一生の生物学	正常と異常の生命科学	外界と生体のインターアクション	
動物テクノロジー概論	生物学における情報科学とプレゼンテーション戦略		バイオビジネスと特許戦略
動物科学のフロンティアⅠ	動物科学のフロンティアⅡ	高次生体制御学特別実験Ⅰ	高次生体制御学特別実験Ⅱ
高次生体制御学演習	動物機能科学特別実験Ⅰ	動物機能科学特別実験Ⅱ	動物機能科学演習

研究科共通科目

生物配列解析基礎	ゲノム情報解析基礎	バイオスタティスティクス基礎論	知識情報処理論
生物配列統計学	分子モデリングと分子シミュレーション	オーム情報解析	機能ゲノム学
システム生物学概論	構造バイオインフォマティクス基礎	農学生命情報科学特論Ⅰ	農学生命情報科学特論Ⅱ
農学生命情報科学特論Ⅲ	農学生命情報科学特論Ⅳ	農学生命情報科学実習Ⅰ	農学生命情報科学特別演習
食の科学ゼミナールⅠ	食の科学ゼミナールⅡ	食の科学ゼミナールⅢ	バイオマス利用研究特論Ⅰ
バイオマス利用研究特論Ⅱ	バイオマス利用研究ゼミナールⅠ	バイオマス利用研究ゼミナールⅡ	国際農業と文化ゼミナール
国際農業と文化実習	生物多様性と農業	自然再生事業モニタリング実習	農学における情報利用ゼミナール
農業環境における放射線影響ゼミナール	Radioecology and agricultural radioactivity	森林環境における放射線影響	農学ライフサイエンス研究倫理
農学ライフサイエンス研究管理演習	農林水畜産業と環境負荷	農林水畜産業と生態系攪乱	

(b)大学院（博士課程）での授業科目名

生産・環境生物学専攻

生産・環境生物学特別実験	生産・環境生物学特別演習
--------------	--------------

応用生命化学専攻

応用生命化学特別実験Ⅲ	応用生命化学特別演習
-------------	------------

応用生命工学専攻

応用生命工学特別実験Ⅲ	応用生命工学特別演習
-------------	------------

森林科学専攻

森林生態社会学特別演習	森林生命環境科学特別演習	森林資源環境科学特別演習 I	森林資源環境科学特別演習 II
森林生態圏管理学特別演習 I	森林生態圏管理学特別演習 II	アジア生物環境学特別演習	森林生態社会学特別実験
森林生命環境科学特別実験	森林資源環境科学特別実験 I	森林資源環境科学特別実験 II	森林生態圏管理学特別実験 I
森林生態圏管理学特別実験 II	アジア生物環境学特別実験		

水圏生物科学専攻

水圏生物科学特別講義 II	水圏生物科学特別実験 II	水圏生物科学特別演習
---------------	---------------	------------

農業・資源経済学専攻

農業経営学特別研究 I (Advanced Study in Farm Management I)	農業経営学特別研究 II (Advanced Study in Farm Management II)	農業経営学特別研究 III (Advanced Study in Farm Management III)	農業経営学特別研究 IV (Advanced Study in Farm Management IV)
比較農業政策学 I (Advanced Study in Policy of Comparative Agriculture I)	比較農業政策学 II (Advanced Study in Policy of Comparative Agriculture II)	比較農業政策学 III (Advanced Study in Policy of Comparative Agriculture III)	比較農業政策学 IV (Advanced Study in Policy of Comparative Agriculture IV)
比較農業史特別研究 I (Advanced Study in Comparative History of Agriculture I)	比較農業史特別研究 II (Advanced Study in Comparative History of Agriculture II)	比較農業史特別研究 III (Advanced Study in Comparative History of Agriculture III)	比較農業史特別研究 IV (Advanced Study in Comparative History of Agriculture IV)
国際農業論特別研究 I (Advanced Study in Agricultural Trade and Development I)	国際農業論特別研究 II (Advanced Study in Agricultural Trade and Development II)	国際農業論特別研究 III (Advanced Study in Agricultural Trade and Development III)	国際農業論特別研究 IV (Advanced Study in Agricultural Trade and Development IV)
アグリビジネス論特別研究 I (Advanced Study in Agribusiness I)	アグリビジネス論特別研究 II (Advanced Study in Agribusiness II)	アグリビジネス論特別研究 III (Advanced Study in Agribusiness III)	アグリビジネス論特別研究 IV (Advanced Study in Agribusiness IV)
国際農村開発学特別研究 I (Advanced Study in International Rural Development I)	国際農村開発学特別研究 II (Advanced Study in International Rural Development II)	国際農村開発学特別研究 III (Advanced Study in International Rural Development III)	国際農村開発学特別研究 IV (Advanced Study in International Rural Development IV)
汎アジア経済特別研究 I (Advanced Study in Pan-Asian Economics I)	汎アジア経済特別研究 II (Advanced Study in Pan-Asian Economics II)	汎アジア経済特別研究 III (Advanced Study in Pan-Asian Economics III)	汎アジア経済特別研究 IV (Advanced Study in Pan-Asian Economics IV)
農業経営学特別演習 I (Advanced Seminar on Farm Management I)	農業経営学特別演習 II (Advanced Seminar on Farm Management II)	農業経営学特別演習 III (Advanced Seminar on Farm Management III)	農業経営学特別演習 IV (Advanced Seminar on Farm Management IV)
農業経営学特別演習 V (Advanced Seminar on Farm Management V)	農業経営学特別演習 VI (Advanced Seminar on Farm Management VI)	農業経営学特別演習 VII (Advanced Seminar on Farm Management VII)	農業経営学特別演習 VIII (Advanced Seminar on Farm Management VIII)
比較農業政策学演習 I (Seminar in Policy of Comparative Agriculture I)	比較農業政策学演習 II (Seminar in Policy of Comparative Agriculture II)	比較農業政策学演習 III (Seminar in Policy of Comparative Agriculture III)	比較農業政策学演習 IV (Seminar in Policy of Comparative Agriculture IV)
比較農業政策学演習 V (Seminar in Policy of Comparative Agriculture V)	比較農業政策学演習 VI (Seminar in Policy of Comparative Agriculture VI)	比較農業政策学演習 VII (Seminar in Policy of Comparative Agriculture VII)	比較農業政策学演習 VIII (Seminar in Policy of Comparative Agriculture VIII)
比較農業史特別演習 I (Seminar in Comparative History of Agriculture I)	比較農業史特別演習 II (Seminar in Comparative History of Agriculture II)	比較農業史特別演習 III (Seminar in Comparative History of Agriculture III)	比較農業史特別演習 IV (Seminar in Comparative History of Agriculture IV)
比較農業史特別演習 V (Seminar in Comparative History of Agriculture V)	比較農業史特別演習 VI (Seminar in Comparative History of Agriculture VI)	比較農業史特別演習 VII (Seminar in Comparative History of Agriculture VII)	比較農業史特別演習 VIII (Seminar in Comparative History of Agriculture VIII)
国際農業論特別演習 I (Seminar in Agricultural Trade and Development I)	国際農業論特別演習 II (Seminar in Agricultural Trade and Development II)	国際農業論特別演習 III (Seminar in Agricultural Trade and Development III)	国際農業論特別演習 IV (Seminar in Agricultural Trade and Development IV)
国際農業論特別演習 V (Seminar in Agricultural Trade and Development V)	国際農業論特別演習 VI (Seminar in Agricultural Trade and Development VI)	国際農業論特別演習 VII (Seminar in Agricultural Trade and Development VII)	国際農業論特別演習 VIII (Seminar in Agricultural Trade and Development VIII)
アグリビジネス論特別演習 I (Seminar in Agribusiness I)	アグリビジネス論特別演習 II (Seminar in Agribusiness II)	アグリビジネス論特別演習 III (Seminar in Agribusiness III)	アグリビジネス論特別演習 IV (Seminar in Agribusiness IV)
アグリビジネス論特別演習 V (Seminar in Agribusiness V)	アグリビジネス論特別演習 VI (Seminar in Agribusiness VI)	アグリビジネス論特別演習 VII (Seminar in Agribusiness VII)	アグリビジネス論特別演習 VIII (Seminar in Agribusiness VIII)
国際農村開発学特別演習 I (Advanced Seminar in International Rural Development I)	国際農村開発学特別演習 II (Advanced Seminar in International Rural Development II)	国際農村開発学特別演習 III (Advanced Seminar in International Rural Development III)	国際農村開発学特別演習 IV (Advanced Seminar in International Rural Development IV)
国際農村開発学特別演習 V (Advanced Seminar in International Rural Development V)	国際農村開発学特別演習 VI (Advanced Seminar in International Rural Development VI)	国際農村開発学特別演習 VII (Advanced Seminar in International Rural Development VII)	国際農村開発学特別演習 VIII (Advanced Seminar in International Rural Development VIII)
汎アジア経済特別演習 I (Seminar in Pan-Asian Economics I)	汎アジア経済特別演習 II (Seminar in Pan-Asian Economics II)	汎アジア経済特別演習 III (Seminar in Pan-Asian Economics III)	汎アジア経済特別演習 IV (Seminar in Pan-Asian Economics IV)
汎アジア経済特別演習 V (Seminar in Pan-Asian Economics V)	汎アジア経済特別演習 VI (Seminar in Pan-Asian Economics VI)	汎アジア経済特別演習 VII (Seminar in Pan-Asian Economics VII)	汎アジア経済特別演習 VIII (Seminar in Pan-Asian Economics VIII)
農業・資源経済学総合演習 (Special Seminar for Dissertation)			

生物・環境工学専攻

生物環境情報工学特別講義	地域環境工学特別講義	生物システム工学特別講義	生物・環境工学特別研究 II
生物・環境工学特別実験実習			

生物材料科学専攻

生物材料科学特別実験 II	生物材料科学特別演習
---------------	------------

農学国際専攻

国際水産開発学特別演習 (Advanced Exercises in Global Fisheries Science)	国際動物資源学特別演習 (Advanced Exercises in Global Animal Resource Science)	国際動物生産学特別実験 (Advanced Experiments in Global Animal Production Science)	国際植物資源学特別演習 (Advanced Exercises in Global Plant Resource)
国際植物材料学特別演習 (Advanced Exercises in Global Plant Material Science)	国際植物生産学特別実験 (Advanced Experiments in Global Plant Production Science)	国際森林環境学特別演習 (Advanced Exercises in Global Forest Environmental Studies)	新機能植物開発学特別演習 (Advanced Exercises in Plant Biotechnology)
地球生物環境学特別実験 (Advanced Research in Global Bio-Environmental Studies)	国際環境経済学特別演習 (Advanced Exercises in International Environmental Economics)	国際環境経済学特別研究 (Advanced Research in International Environmental Economics)	国際情報農学特別演習 (Advanced Exercises in Global Agro-Informatics)
国際情報農学特別実験 (Advanced Experiments in Global Agro-Informatics)	国際農業開発学特別演習 (Advanced Exercises in Agricultural Development Studies)	国際農業開発学特別実験 (Advanced Experiments in Agricultural Development Studies)	農学国際特別演習 (Advanced Exercises in Global Agricultural Science)
農学国際特別実験・研究 (Advanced Experiments and Research in Global Agricultural Sciences)	農学国際実地研究Ⅱ (On-site Practical Research in Global Agricultural Sciences II)	環境政策特別講義 (Advanced Environment Policy)	

農学国際専攻（国際農業開発学コース）

International Program in Agricultural Development Studies (IPADS)

国際農業開発学特別セミナー (IPADS Advanced Research Seminars)	国際農業開発学特別研究 (IPADS PhD Research)	国際農業開発学実地研究 (IPADS Field Studies)
---	-------------------------------------	--------------------------------------

生圏システム学専攻

生物多様性科学特別演習	保全生態学特別演習	緑地創成学特別演習	森圏管理学特別演習
水域保全学特別演習	耕地生圏生態学特別演習	水圏生産システム学特別演習	森林圏生態学特別演習
森林生物機能学特別演習	森林圏生態社会学特別演習	森林流域管理学特別演習	生圏システム学特別実験・研究

応用動物科学専攻

動物科学フロンティア 応用動物科学特別演習Ⅱ	応用動物科学特別実験Ⅰ	応用動物科学特別実験Ⅱ	応用動物科学特別演習Ⅰ
---------------------------	-------------	-------------	-------------

獣医学博士課程 獣医学専攻

生体機能形態学特別講義	生体機能形態学特別演習	生体機能形態学特別実験	生体防御学特別講義
生体防御学特別演習	生体防御学特別実験	獣医臨床学特別講義	獣医臨床学特別演習
獣医臨床学特別実験	獣医学特論	ライフサイエンス統計学講義	科学プレゼンテーション論Ⅰ
科学プレゼンテーション論Ⅱ	科学プレゼンテーション論Ⅲ	生体機能形態学特論	生体防御学特論
獣医臨床学特論			

大学院共通授業科目

緑地創成学特論	汎アジア経済論Ⅰ (Pan-Asian Economics I)	汎アジア経済論Ⅱ (Pan-Asian Economics II)	汎アジア経済論Ⅲ (Pan-Asian Economics III)
汎アジア経済論Ⅳ (Pan-Asian Economics IV)	汎アジア経済論Ⅴ (Pan-Asian Economics V)	汎アジア経済論Ⅵ (Pan-Asian Economics VI)	汎アジア経済論Ⅶ (Pan-Asian Economics VII)
汎アジア経済論Ⅷ (Pan-Asian Economics VIII)	農学国際特論Ⅲ	サステナビリティと作物生産学	

(c) 博士論文（課程博士）の論文題目 2016 年度

生産・環境生物学専攻
植物病原細菌の花き類に対する病原性に関する研究
フレキシウイルスの細胞間移行を阻害する劣性抵抗性遺伝子に関する研究
カイコ培養細胞を用いた piRNA 研究
イネのショ糖リン酸合成酵素（SPS）に関する生産生理学的研究

応用生命化学専攻
紅藻スサビノリ (<i>Pyropia yezoensis</i>) の栄養欠乏応答に関する研究
A Study on the Inhibition Mechanism of Halide and Disulfide on the Activity of Polyphenol Oxidase (PPO) (ハロゲン化物ならびにジスフィド物によるポリフェノールオキシダーゼの阻害機構)
マウスのフェロモン ESP ファミリーが引き起こす社会行動とその神経回路基盤の解析
Effect of apple-derived condensed tannins and pomegranate-derived polyphenols on cytokines expression of intestinal epithelial cells (リンゴ由来縮合タンニンとザクロ由来ポリフェノールが腸管上皮細胞のサイトカイン応答に与える影響に関する研究)
植物の熱ショック転写因子 HsfA 1 を介した高温ストレス応答性伸長成長の解析
Synthesis of boron transport systems and analysis of boron toxicity mechanisms in roots of <i>Arabidopsis thaliana</i> (シロイヌナズナの根におけるホウ素輸送の統合的理解と、過剰ホウ素による生育阻害機構の解明)
マイコトキシン生産阻害物質の作用機構に関する研究
水田土壌の窒素循環を担う微生物群集のオミクス法を用いた網羅的解析
窒素施肥が米の成分組成および品質に与える影響の分子生物学的解析
Study on heat shock protein 90 complex formation with SCAP/SREBP and regulation of SREBP function (熱ショックタンパク質 90 による SCAP/SREBP 複合体形成と SREBP 活性調節に関する研究)
Effect of imidazole dipeptides on gut immunity and inflammatory responses (イミダゾールジペプチドの腸管免疫系および炎症反応に対する作用に関する研究)
がん細胞に対して細胞毒性を有する天然有機化合物の合成研究

応用生命工学専攻
生殖細胞特異的ヒストンバリエーションにおける新規リン酸化修飾の発見と生理的機能の解明
A study on β -glucosidases derived from wood-feeding insect and symbiotic protist of termite (材食性昆虫およびシロアリ腸内原生生物に由来する β -グルコシダーゼに関する研究)
イネのフラボノイド型ファイトアレキシンの生産制御機構の解明
放線菌におけるアミノ基キャリアタンパク質を介して生合成される新規天然化合物の探索・発見とその特異な N-N 結合の形成機構に関する研究
希少放線菌 <i>Actinoplanes missouriensis</i> の孢子嚢および休眠孢子形成の制御機構に関する研究
フラグメント分子軌道法を用いたファーマコフォアモデリングとバーチャルスクリーニングへの応用
^{13}C labeling-based approach towards unlocking of diterpenoid phytoalexins biosynthetic pathways in rice (^{13}C 標識ジテルペン炭化水素の投与によるイネのファイトアレキシン生合成経路の解明)
放線菌 <i>Streptomyces griseus</i> の黄色色素生産と主要シグマ因子発現の制御機構に関する研究
異質倍数体の環境ストレス応答に関する遺伝子発現解析

森林科学専攻
伝統的覆下茶産地における文化的景観の変遷に関する研究
カゲロウ幼虫における体色斑の集団内多型、集団間変異および隠蔽機能
Influences of ambrosia beetle (<i>Platypus quercivorus</i>) attacks on evapotranspiration in a secondary warm-temperate forest (暖温帯二次林の蒸発散量に及ぼすカシノナガキクイムシ (<i>Platypus quercivorus</i>) の加害の影響)

水圏科学生物専攻
Studies on two <i>Perkinsus</i> species infecting the Manila clam (アサリに寄生する <i>Perkinsus</i> 属原虫2種に関する研究)
水産無脊椎動物ヘモリンフによる炎症誘発機構に関する研究
東シナ海沖合域における流れ藻の分布、起源、輸送に関する研究
三陸海岸におけるアユの生活史に関する研究
エゾバフンウニとキタムラサキウニの生息場と食性に関する比較生態学的研究
北西太平洋におけるカツオの北上回遊機構に関する研究
マアジ骨格筋における致死誘導性細胞生物学的変動に関する研究
三陸沿岸域に來遊するアオウミガメ (<i>Chelonia mydas</i>) の採餌生態に関する研究
Nutri-physiological studies on amino acid absorption mechanisms in the intestine of Mozambique tilapia (モザンビークティラピア腸管におけるアミノ酸吸収機構に関する栄養生理学的研究)
Habitat use and behavior of <i>Lates japonicus</i> in Shimanto Estuary, an endangered endemic fish in Japan (日本の絶滅危惧固有種アカメ <i>Lates japonicus</i> の四万十川河口域における生息場利用と行動)
Studies for the development of integrated parasite management (IPM) system against <i>Cryptocaryon irritans</i> , a parasitic ciliate of marine fin fishes (海産魚に寄生する繊毛虫 <i>Cryptocaryon irritans</i> に対する総合的寄生虫管理システム開発のための研究)

農業・資源経済学専攻
Women's Empowerment through Modern Dairy Farming in Rural Bangladesh (バングラデシュ農村における近代的酪農を通じた女性のエンパワーメント)
戦後沖縄における食糧米政策の展開過程—外米依存と島産米保護の相克に着目して—
PRICE AND TRADE POLICY DISTORTIONS IN FOOD CROP SECTOR IN SRI LANKA: IMPLICATIONS ON INCOME AND POVERTY (スリランカの食用作物部門における価格および貿易政策の歪み：所得と貧困への意味)

生物・環境工学専攻
分光光量子束密度の時間変化パターンがコスレタスの純光合成速度、形状および成長速度に及ぼす影響
Quantitative Evaluation of Microbial Contamination of Meat with Fluorescence Spectroscopy (蛍光分光分析による食肉加工プロセスにおける清浄度評価)
Analysis of light spectrum effects on photosynthetic electron transport based on excitation energy distribution between photosystem I and II (光合成電子伝達に光質が及ぼす影響の光化学系 I・II 間の励起エネルギー分配に基づく解析)

生物材料科学専攻
CLT 構造における引きボルト接合部の力学特性と耐力算定に関する研究
Study on the erythro or threo preferential degradation of β -O-4 type lignin model compounds under oxygen and hydrogen peroxide bleaching conditions (酸素および過酸化水素漂白条件下における β -O-4 型リグニンモデル化合物のエリトロ / トレオ優先的分解に関する研究)
<i>In-Situ</i> Chemical Structure Analysis of Cured Glue-Line of Aqueous Vinyl Polymer-Isocyanate Adhesive for Wood Using FT-NIR and FT-IR Spectroscopy (FT-NIR および FT-IR による水性高分子-イソシアネート系木材接着剤の接着層の <i>in-situ</i> 化学構造分析)
長鎖と短鎖からなるセルロース混合エステル合成と構造および物性に関する研究

農学国際専攻
日本と中国における気候温暖化に対する植物季節の応答性とその変動要因の解明
Alleviating soil acidity for rice grown with application of soil amendments and its effect on GHG emissions-Finding recommendations for rice production in Malaysian acid soil (土壌改良剤による水田土壌酸性度の改善と温室効果ガス排出への影響—マレーシア酸性土壌における水田作への提言)
パナマ農村の生業戦略に見る焼き畑とコーヒー栽培の重要性

農学国際専攻（続き）

カンボジアの森をめぐる移動と交流—カルダモン山脈と中央平野部の地域間関係史

Why Farmers in the Rainfed Rice Regions of Southern Cambodia Adopt the System of Rice Intensification (SRI)
(カンボジア南部天水稲作地域の農家が集約稲作農法を (SRI) を採用するのはなぜか)

一酸化窒素に依存しないマクロファージのリーシュマニア殺傷作用に関する研究

サブサハラ・アフリカ稲作開発における高収量品種の普及戦略：ベナン中央部のネリカを事例として

Evolution of musculoskeletal structure of neck in artiodactyls
(偶蹄類における頸部筋骨格構造の進化)

生圏システム学専攻

The effectiveness of urban wooded corridors: Can they increase bird species richness in urban patchy woodlots? (都市の樹林性コリドーの有効性：コリドーはパッチ状樹林地における鳥類多様性を高めるか)

行政データに基づいた野生動物の個体群動態のモデリングと管理への応用

ニホンミツバチの生態特性と花資源利用—岩手県と奄美大島を事例とした保全生態学的研究—

茨城県酒沼の塩性湿地における魚類群集の構造

応用動物科学専攻

ブタ卵母細胞における核外移行システムの機能解析

Analysis on the functions of ubiquitin-proteasome-pathway factors in porcine oocyte maturation process
(ユビキチン/プロテアソーム経路関連因子のブタ卵成熟過程における機能の解析)

Involvement of BAFF in development of splenomegaly during visceral leishmaniasis
(内臓型リーシュマニア症における脾腫形成機序への BAFF の関与)

栄養膜幹細胞における Lin28a の機能に関する研究

社会的相互作用を介したストレス緩和効果の持続性に関する研究

獣医学専攻

マウス胆嚢・胆管系形成における *Sox17* 遺伝子の役割解明及び新生児胆道閉鎖症モデルマウスの作出

マウス産褥子宮に存在する老化細胞の除去機構と次回妊娠に及ぼす影響の解析

Studies on pathophysiological roles of bile acids in canine gallbladder mucocele
(犬の胆嚢粘液嚢腫における胆汁酸の病態生理学的役割に関する研究)

Studies on the epidemiology and pathogenicity of canine and feline gastric *Helicobacter* spp. in Japan (国内の犬・猫の胃に感染する *Helicobacter* 属菌の疫学調査および病原性の検討)

摂食制御における自由走行運動の役割に関する研究

動物の心内膜炎由来レンサ球菌に関する研究

犬と猫におけるオピオイドの侵害刺激伝達抑制作用の比較

Studies on Partial Masculinization in Mouse Embryonic Ovaries Grafted into Male Nude Mice
(雄ヌードマウスに移植したマウス胎子卵巣の雄性化機構に関する研究)

アカバネウイルスの神経病原性に関する病理学的検討

Studies on the pathophysiological role of CD44 variant isoforms in canine lymphoma
(犬のリンパ腫における CD44 variant isoform の病態生理学的役割に関する研究)

飼養環境が育成牛の生体機能に及ぼす影響に関する研究

The anti-tumour effects of etoposide on canine osteosarcoma
(犬骨肉腫に対するエトポシドの抗腫瘍効果)

Exploration of a novel mesenchymal stem cell in canine bone marrow and its therapeutic effects for acute spinal cord injury
(犬の新規骨髄間葉系幹細胞の探索と急性期脊髄損傷に対する治療効果の検討)

(1) 農学部公開セミナー

最新の研究成果の社会への還元の一環として春と秋の年2回公開セミナーを企画し、2016年度までに51回実施した。2016年度開催は次の通りである。

第50回 「学」と「業」 2016年6月18日（参加者238名）

- | | | |
|----------------------------------|----------------|--------|
| (1) 「育種学と育種：データ科学を応用し、品種改良を加速する」 | 生産・環境生物学専攻 准教授 | 岩田 洋 佳 |
| (2) 「環境に優しいセルロースナノファイバーの科学」 | 生物材料科学専攻 准教授 | 齋藤 継 之 |
| (3) 「水産資源の持続的有効利用と水産学」 | 水圏生物科学専攻 准教授 | 山 川 卓 |

第51回 「農学における芸」 2016年11月12日（参加者138名）

- | | | |
|-------------------------|----------------|---------|
| (1) 「結晶からのぞく酵素の芸術」 | 応用生命工学専攻 教授 | 伏 信 進 矢 |
| (2) 「暮らしを支える園芸学」 | 生産・環境生物学専攻 教授 | 柴 田 道 夫 |
| (3) 「「樹芸」の視点で考える社会の方向性」 | 附属演習林樹芸研究所 准教授 | 嶋 田 重 裕 |

(2) 附属施設のイベント

日程	イベント名	附属施設名
2016年4月～9月	農場博物館開館（毎週火・金曜日）	生態調和農学機構
2016年4月2日・3日	観桜会、農場博物館臨時開館	生態調和農学機構
2016年4月9日	鴨川市共同事業「野鳥の巣箱をかけよう（巣箱観察会）」	附属演習林千葉演習林
2016年4月23日	犬山研究林利用者協議会「春のふれあい自然観察会」	附属演習林生態水文学研究所
2016年4月23日	教職員向け特別ガイド「春の彩りを訪ねて」	附属演習林富士癒しの森研究所
2016年4月24日	休日公開	附属演習林田無演習林
2016年5月1日	休日公開	附属演習林田無演習林
2016年5月20日	ガイドツアー「演習林の試験地見学」	附属演習林秩父演習林
2016年5月29日	神社山自然観察路春季一般公開	附属演習林北海道演習林
2016年5月29日～11月26日	生態調和農学機構・多摩六都科学館共催公開講座「農と食の体験塾「大豆編」」	生態調和農学機構
2016年6月5日	子ども樹木博士認定会	附属演習林田無演習林
2016年6月14日～10月	生態調和農学機構・西東京市共同事業「ひまわりプロジェクトDE OIL 2016」	生態調和農学機構
2016年6月18日	とよた森林学校2016「森林セミナー」	附属演習林生態水文学研究所
2016年6月19日	公開セミナー	附属演習林北海道演習林
2016年6月21日～7月22日	ハス見本園一般公開・農場博物館臨時開館	生態調和農学機構
2016年6月25日	コープあいち「森づくり植生調査」	附属演習林生態水文学研究所
2016年7月5日～8日	農場博物館での七夕インスタレーション	生態調和農学機構
2016年7月10日	大麓山ハイキング登山会	附属演習林北海道演習林
2016年7月23日	観蓮会・農場博物館臨時開館	生態調和農学機構
2016年7月25日～27日	高校生のための森と海のゼミナール～大学の先生と考える環境問題と生物多様性～	附属演習林千葉演習林
2016年8月1日	東大農場・演習林子どもサマースクール	附属演習林田無演習林
2016年8月1日	東大農場・演習林子どもサマースクール～夏の田んぼと林を探検しよう～	生態調和農学機構
2016年8月5日～6日	公開講座「東大の森林で昆虫採集」	附属演習林秩父演習林
2016年8月13日	愛知中部水道企業団「水」をテーマにした親子体験教室	附属演習林生態水文学研究所
2016年8月16日～26日	「ひまわりプロジェクトDE OIL 2016」ひまわり迷路一般公開	生態調和農学機構
2016年9月3日	せと環境塾2016	附属演習林生態水文学研究所
2016年9月14日	第2回癒しの森の植生調査隊	附属演習林富士癒しの森研究所
2016年9月24日～30日	西東京市観光事業「憩いのまち西東京カードラリー」参加	生態調和農学機構
2016年9月29日	第2回癒しの森の植生調査隊 追加調査	附属演習林富士癒しの森研究所
2016年10月1日	東大教職員向け特別ガイド「きのこに親しむ」	附属演習林富士癒しの森研究所
2016年10月2日	神社山自然観察路秋季一般公開	附属演習林北海道演習林

2016年10月15日	東京大学ホームカミングディ企画「秋の収穫体験会」	生態調和農学機構
2016年10月22日	チョコレート作りを体験しよう！	附属演習林樹芸研究所
2016年10月29日	牧場公開デー	附属牧場
2016年10月29日～30日	千葉演習林一般公開「郷台畑へ行こう！」	附属演習林千葉演習林
2016年10月30日	子ども樹木博士認定会	附属演習林田無演習林
2016年11月5日	鴨川市交流事業「野鳥の巣箱をつくろう」	附属演習林千葉演習林
2016年11月5日～6日	東京大学秩父演習林 創立100周年記念式典・祝賀会・見学会	附属演習林秩父演習林
2016年11月13日	犬山研究林利用者協議会「秋のふれあい観察会」	附属演習林生態水文学研究所
2016年11月26日	犬山市市民大学講座（案内人養成講座現地研修）	附属演習林生態水文学研究所
2016年11月30日	薪づくりのための安全作業講習会	附属演習林富士癒しの森研究所
2016年12月3日	東大教職員向け特別ガイド「千葉演習林で楽しむ紅葉とランチ」	附属演習林千葉演習林
2016年12月3日	公開講座「林業遺産・岩樟園クスノキ林見学会」	附属演習林樹芸研究所
2016年12月3日	あいち自然再生カレッジ第3回講義	附属演習林生態水文学研究所
2016年12月4日	休日公開	附属演習林田無演習林
2016年12月4日	東大教職員向け「リース作り体験会」	附属演習林田無演習林
2016年12月4日	シデコブシの会「標石を探そうツアー」	附属演習林生態水文学研究所
2016年12月10日	第23回浜名湖をめぐる研究者の会	水産実験所
2016年12月11日	影森祭	附属演習林秩父演習林
2016年12月14日	薪づくりのための安全作業講習会	附属演習林富士癒しの森研究所
2017年1月21日	公開講座「秩父演習林の哺乳類」	附属演習林秩父演習林
2017年2月3日	森林博物資料館一般公開	附属演習林千葉演習林
2017年2月4日	東大教職員向け特別ガイド「冬の散歩みち」	附属演習林富士癒しの森研究所
2017年2月11日	機構公開セミナー「植物のコミュニケーション-環境、微生物、周辺植物との語り-」(やさしい科学技術セミナー)(国際科学技術財団共催)	生態調和農学機構
2017年2月18日	せと環境塾「里山学習講座～野生動物との共存を目指して～」	附属演習林生態水文学研究所
2017年3月1日	千葉演習林「冬の研修会」 ※千葉演習林教職員対象	附属演習林千葉演習林
2017年3月8日	公開講座「富士癒しの森研究所研究報告会2016」	附属演習林富士癒しの森研究所



全学体験ゼミナール「雪の森林に学ぶ」
(写真提供：北海道演習林)



伝統文化行事に貢献（演習林産スギを使用した鳥居）
(写真提供：千葉演習林)



地域絶滅が心配されるヒメコマツの繁殖量調査
(写真提供：千葉演習林)

(1) 研究成果発表 (研究科WEBサイトに掲載したもの)

- ・オスらしさを高めるフェロモンをマウスで発見—フェロモンに新しい概念—16.04.18
- ・バイオ燃料として期待される微細緑藻から新規炭化水素生成酵素遺伝子の特定に成功 16.04.18
- ・植物の接触感知に関わるタンパク質を発見 16.04.18
- ・ムスクの香りを感じる受容体の応答特異性と進化—たった一つの受容体がムスク香の感知に影響を及ぼす—16.04.25
- ・イネの防御物質生産の鍵となる転写因子を発見—ストレスに強いイネの育成へ—16.04.27
- ・腸脳軸を介した新しいエネルギー代謝調節機構を解明 16.05.31
- ・「未就学児の父母に聞く 子の匂いに関する調査」9割以上のお母さんが「赤ちゃんの頭の匂いは愛おしい」。子の匂いは衛生ケアにもつながる。 16.06.03
- ・コケにおける化学物質を利用した防御システムを発見—植物のストレス応答進化の解明につながる成果—16.06.13
- ・「イネの化学防御システムにおける遺伝子クラスターの進化軌跡を同定」16.06.13
- ・大豆イソフラボンによる筋肉減少予防効果のメカニズムを解明 16.06.15
- ・大豆たんぱく質βコングリシニンの抗肥満・代謝改善効果の新たな分子機構を解明 16.06.23
- ・ファイトプラズマ病を一網打尽に検出できる遺伝子診断キットの開発—根絶事業により途上国農業生産への貢献が期待—16.06.03
- ・ブタ心内膜炎変部には2つの表現型の豚レンサ球菌が潜伏することを比較ゲノム解析により証明 16.07.20
- ・虫歯菌の酵素からポリエチレンテレフタレートやナイロンを越える高耐熱性樹脂の開発に成功 16.08.02
- ・根寄生植物由来KAI2タンパク質が発芽誘導物質を選択的に認識する機構 16.08.16
- ・牛のD型インフルエンザを国内で初めて検出 16.08.23
- ・急性肺障害の悪化因子を発見 16.08.29
- ・満月が近づくと出産数が増える—ウシの研究により変化が明らかに— 16.09.02
- ・「インプラント周囲炎の原因となる細菌群集構造を解明」16.09.05
- ・胎生動物出現の鍵：糖による新たなエピジェネティック修飾を発見「哺乳類に特有な病気の原因解明、治療開発に栄養学的観点から期待」16.09.12
- ・酵母による異宿主タンパク質発現系における新規ランダム変異導入法の開発 16.09.26
- ・原始的な中央代謝系で働く酸化還元酵素の立体構造 16.09.26
- ・放線菌におけるアミノ基キャリアタンパク質を介した二次代謝経路の発見 16.09.26
- ・流行性耳下腺炎（おたふくかぜ）の原因ウイルスの受容体構造を解明—病原性やワクチンに関して新知見—16.09.27
- ・代謝経路の進化仮説の根拠となる古細菌におけるリジン生合成経路の解明 16.10.11
- ・ノックアウトするとウイルス抵抗性になる植物タンパク質遺伝子を発見—精密ゲノム編集を利用したウイルス抵抗性作物の開発につながる成果— 16.10.12
- ・制限酵素が目的配列を探索する際の新規なメカニズム 16.10.15
- ・最小オープンリーディングフレーム「AUG-stop」を介したリボソームを舞台とした新たな遺伝子発現制御機構の発見 16.10.21
- ・乳酸菌が金ナノ粒子を生成する分子機構を解明 16.10.28
- ・ガーデニングと健康促進の関係を示す科学的根拠を実証—メタ解析を用いた初の試み—16.12.21
- ・膿菌が呼吸酵素を緑作り替えることで環境適応する新しいメカニズムを発見 16.12.22
- ・イネにおいて節の輸送体の欠損はコメのリン蓄積を減少させる 17.01.4
- ・植物の水分欠乏時の成長促進機構の発見—作物の乾燥や塩ストレス時の成長や収穫を向上させる技術開発への貢献に期待—17.01.11
- ・ウイルスは植物の翻訳装置をハイジャックすることを発見 17.01.11
- ・天然ペプチド骨格の合理的な設計手法の開発—天然物資源からの創薬研究がより簡便にスピーディーに— 17.02.15
- ・脂質代謝を調節する転写因子SREBPの活性化を熱ショックタンパク質90が厳密に制御する新たな機構の発見 17.02.23
- ・世界初！ 冷凍・冷蔵不要で簡易・迅速・超高感度・安価な遺伝子診断技術を開発—ファイトプラズマユニバーサル診断キット—17.02.27
- ・土からの栄養吸収に重要な、根の細胞間の隙間をふさぐ仕組みを解明—植物の栄養輸送の新しい仕組み—17.02.28
- ・統合失調症研究に新たな視点—マウス成熟個体において認知機能を回復させることに成功—17.03.01
- ・藻食性腹足類のPL-14酵素が褐藻アルギン酸を効率的に分解する仕組み 17.03.01
- ・良薬は口に苦し！？ ビールの苦味成分が脳内の清掃細胞を活性化し、アルツハイマー病を予防 17.03.06
- ・新規な糖質加水分解酵素「エンド-β-1,2-グルカナーゼ」の同定と機能構造解析 17.03.17
- ・褐藻成分フコースが哺乳類の肥満を予防 17.03.21
- ・植物は2つの異なる応答機構によって低温ストレスに対する耐性を獲得している 17.03.27
- ・「あなたも“花咲爺さん”になれる！」—開花時期・収穫時期を自由自在に制御できるイネ系統を開発！ 野外でも実証実験！ 生産性・品質の向上が可能に。—17.03.27

(2)受賞等 (研究科WEBサイトに掲載したもの)

- ・日本農学賞・読売農学賞：水圏生物科学専攻 金子豊二 教授、生物材料科学専攻 磯貝明 教授 16.04.18
- ・2016年度日本農芸化学会学会賞：応用生命化学専攻 佐藤隆一郎 教授 16.04.18
- ・Hevesy賞：食の安全研究センター 中西友子 特任教授(元放射性同位元素施設教授) 16.05.10
- ・三島海雲学術賞：応用動物科学専攻 村田幸久 准教授 16.07.13
- ・ロレアル-ユネスコ女性科学者 日本奨励賞：生物材料科学専攻 田仲玲奈 農学共同研究員 16.08.09
- ・Olchemim Award賞：応用生命化学専攻 浅見忠男 教授 16.09.23
- ・本田賞：生物材料科学専攻 磯貝明教授 16.09.29
- ・Aalto大学より名誉学術博士号授与：生物材料科学専攻 磯貝明教授 16.11.11
- ・蚕糸有功賞：生産・環境生物学専攻 川本宗孝学術支援専門職員 16.11.25
- ・2016年度業務改革総長賞：農学系事務部総務課図書チーム 16.12.27
- ・第13回(平成28年度)日本学術振興会賞：応用生命工学専攻 伏信進矢 教授、生産・環境生物学専攻 勝間進 准教授 16.12.28
- ・平成28年度日本エネルギー学会賞(学術部門)：生物材料科学専攻 鮫島正浩教授 17.03.03
- ・日本学士院賞：生産・環境生物学専攻 難波成任教授 17.03.13



ユネスコ無形文化遺産「和食」を支える「国菌」、麹菌。農学部では、さまざまな微生物についての研究を展開しています。(写真提供：応用生命工学専攻)



種苗法第18条の規定に基づき、2016年11月17日(農林水産省告示第2291号)に生態調和農学機構の前身の1つである緑地植物実験所で育成された花ハス「月のほほえみ」が品種登録されました。(品種登録番号：25521)
(写真提供：生体調和農学機構)

(1) 国際交流協定

国際交流協定は、下記一覧表のとおり22の国・地域と55の協定が締結されており、関係専門分野を中心に学術交流・学生交流が行われている。そのうち、ガジャマダ大学（インドネシア）、南開大学（中国）、ボン大学（ドイツ）との全学協定では担当部局として学内の中心的役割を果たしている。

相手国	相手大学（機関）	締結年月日/最終更新日	専門分野	学生交流の覚書 (授業料不徴収)
インド	タミルナードゥ農業大学	2013年 5月27日	農学、生物資源環境学	○
インドネシア	ボゴール農科大学	1988年10月21日 2016年12月28日	農学	○
	*ガジャマダ大学	2010年11月22日	農学	○
	ムラワルマン大学	2006年 1月27日 2017年 4月28日	農学・生物資源環境学	○
	ランブン大学農学部	2014年 4月16日	農学	○
	ソウル大学校農業生命科学大学	2006年 9月 9日 2016年 9月 9日	農学（獣医学を除く）	○
韓国	ソウル大学校獣医科大学	2016年 5月20日	獣医学、畜産学、応用動物科学	○
	釜慶大学校水産科学大学	2007年 1月24日 2017年 1月24日	水産科学、海洋科学	○
	釜慶大学校環境海洋大学	2007年 1月24日 2017年 1月24日	水産科学、海洋科学	○
	江原大学校 山林環境科学学院	2013年 1月31日	木材科学、森林科学	
	建国大学校獣医学部	2015年 4月28日	獣医学	○
カンボジア	カンボジア農業開発研究所	2009年 7月15日 2014年 7月15日	農学、生物資源環境学	
スリランカ	ルフナ大学	2011年 6月 7日 2016年 6月 7日	農学	○
タイ	カセサート大学獣医学部・農学部・林学部	1998年 6月 8日 2014年 6月 8日	農学、生物資源環境学	○
	コンケン大学農学部	2009年 2月 3日 2014年 2月 3日	農学	○
	農業研究開発庁	2011年 7月12日 2016年 7月12日	農学	
	チェンマイ大学	2016年 6月 8日	農学	○
台湾	国立台湾海洋大学	2006年 4月27日 2016年 4月27日	水産学・海洋科学	○
	国立中興大学獣医学院	2008年 3月26日 2013年 3月26日	獣医学	○
	台北医学大学 公衆衛生栄養学部	2013年 1月28日	公衆衛生学、食品栄養学	○
	国立屏東科技大学獣医学院	2015年 6月12日	獣医学	○
	台湾大学生物資源農学院	2016年 6月 7日	農学	○
中国	北京林業大学 (北京林学院)	1984年 2月25日 2016年 7月11日	農学	○
	東北林業大学	1996年12月23日 2017年 2月 9日	農学、生物資源環境学	○
	中国農業大学	1997年 9月17日 2012年 9月17日	農学	○
	南京林業大学	2002年 3月 9日 2017年 3月 9日	農学、生物資源環境学	○
	中国科学院南京土壤研究所	2007年 1月 5日 2017年 1月 5日	環境保全研究分野	
	南京農業大学	2007年 3月21日 2017年 3月21日	農学、生物資源環境学	○
	四川農業大学	2007年 3月29日 2017年 3月29日	農学	○

中国	*南開大学	2015年12月 6日	農学を含む全分野	○
	西南大学	2014年 1月 8日	農学	○
	中国科学院大学資源環境学院	2014年 5月30日	農学	○
	東北師範大学地理科学学院	2015年 3月31日	農学	○
	海南大学園芸園林学院	2016年10月28日	農学	○
	浙江農林大学	2016年12月14日	農学、生物資源環境学	○
ベトナム	ベトナム国立農業大学 (ハノイ農科大学)	1995年12月25日 2015年12月25日	農学、生物資源環境学	○
	カントー大学	2010年 7月19日 2015年 7月19日	農学	○
マレーシア	マレーシア・サバ大学	2017年 6月12日	熱帯森林科学	○
ミャンマー	イエジン農業大学	2017年 7月21日	農学	
モンゴル	モンゴル国立農業大学	2003年10月13日 2013年10月13日	応用生物科学	○
トルコ	エーグ大学医学部	2014年 7月24日	農学、医学	
アルゼンチン	ラ・プラタ大学	1990年12月 6日 2015年12月 6日	獣医学	
コロンビア	国際熱帯農業センター	2010年 2月19日	農学	
アメリカ合衆国	ミネソタ大学バイオテクノロジー研究所	2017年 4月 5日	農学	
イギリス	エジンバラ大学獣医校	2014年 3月 9日	獣医学	○
	ニューカッスル大学農業食料農村振興研究所	2017年 4月 3日	農学	
スウェーデン	スウェーデン農科大学	2004年 8月23日 2014年 8月23日	農学	○
ドイツ	カールスルーエ工科大学	2010年12月 7日 2015年12月 7日	農学	○
	*ボン大学	2016年 2月 3日	農学、薬学、医学などの自然科学分野	○
フィンランド	アールト大学 (ヘルシンキ工科大学)	2010年 8月18日	農学	○
フランス	アグロパリテック (パリーグリニオン国立農学院)	1996年 1月30日 2016年 3月18日	農学	○
	フランス原子力庁 環境バイオテクノロジー研究所	2010年 9月 7日 2015年 9月 7日	農学	
	フランス原子力・代替エネルギー庁ライフサイエンス局	2014年12月16日	農学	
ポーランド	クラクフ農科大学	2012年12月 5日	森林科学	○
	ワーミヤ・マズリー大学	2013年 7月 2日	農学	○

*印は全学協定

(2)教員の海外渡航

教員の海外渡航は、渡航先も多岐にわたり多数の国々が本研究科教員の研究交流の対象となっている。事業別に分類してみると、文部科学省並びにその他の政府関係機関が28.2%、科学研究費補助金が30.6%、その他の国内資金が28.7%、外国政府・研究機関等が11.4%、私費が1.1%となっている。

教員の海外渡航件数（事業別）

区分	2014年度	2015年度	2016年度
1.文部科学省事業	4	22	28
2.科学研究費補助金	167	152	175
3.その他の政府関係の派遣	88	120	133
(1) 日本学術振興会	(11)	(16)	(38)
(2) 国際協力機構	(8)	(21)	(13)
(3) その他	(69)	(83)	(82)
4.その他の国内資金	143	176	164
5.外国政府・研究機関等	20	39	65
6.私費	7	11	6
合計	429	520	571

教員の海外渡航件数（地域別）

地域	2014年度	2015年度	2016年度
北米	74	117	94
中南米	24	36	30
ヨーロッパ	65	108	82
アフリカ	10	19	11
中近東	9	8	5
中国	44	55	81
韓国	27	24	33
その他のアジア	178	153	224
オセアニア	15	15	15
合計	446	535	575

(3)外国人研究者等の受入れ

海外との学術交流は、外国人研究者等の受入れの面でも活発に行われており、アジアからの研究者が全体の7割弱を占めているのが特徴だが、部局協定などに基づいて、世界各国から研究者を受け入れている。このほかに視察などの目的で本研究科を訪れる外国人の数も多数にのぼっている。

外国人研究者等の受入人数（事業別）

区分	2014年度	2015年度	2016年度
1.文部科学省事業	5	64	6
2.科学研究費補助金	44	19	11
3.その他の政府関係機関	45	48	88
(1) 日本学術振興会	(27)	(24)	(52)
(2) 国際協力機構	(0)	(2)	(3)
(3) その他	(18)	(22)	(33)
4.その他の国内資金	27	26	30
5.外国政府・研究機関等	29	86	59
6.私費	48	26	44
合計	198	269	238

外国人研究者等の受入人数（地域別）

地域	2014年度	2015年度	2016年度
北米	26	7	16
中南米	2	5	7
ヨーロッパ	36	27	47
中近東	3	2	4
中国	42	49	65
韓国	15	20	15
その他のアジア	66	152	76
オセアニア	4	6	6
アフリカ	4	1	2
合計	198	269	238

(4)留学生の受入れ

本研究科では大学院生を中心に多数の留学生を受け入れており、2017年5月1日現在の大学院留学生は265名である。全大学院生に占める留学生の割合は、25%以上であり、これは本学でも高い比率である。

出身国・地域別に見ると、アジアを中心に多様な33ヶ国から留学生を受け入れている。そのうち中国と韓国からの留学生の割合が全体の約60%を占めている。

課程別の在籍者数は、博士課程58.5%、修士課程34.0%、研究生7.5%であり、博士課程在籍者数の割合が非常に高い。

専修別留学生数（2017.5.1現在）

学部：応用生命科学課程5名（うち学部研究生1名）

環境資源科学課程3名（うち学部研究生2名）

※在留資格は「留学」
(各年度5.1現在)

専攻別留学生数

年	専攻名	生産・環境生物学	応用生命科学	応用生命工学	森林科学	水圏生物科学	資源・農業・経済学	環境工学・生物	生物材料科学	農学国際	生圏システム学	応用動物科学	獣医学	合計
2015	修士課程	1	7	6	5	8	1	4	5	19	1	2		59
	博士課程	13	18	18	13	15	6	6	3	16	3	4	10	125
	外国人研究生	1	2	7	1	1				5			3	20
	合計	15	27	31	19	24	7	10	8	40	4	6	13	204
2016	修士課程	1	10	9	5	8	5	6	3	27		3		77
	博士課程	13	19	18	14	11	5	7	12	14	3	3	13	132
	外国人研究生	4	8	5	2	5		2	1	1	1	1	2	32
	合計	18	37	32	21	24	10	15	16	42	4	7	15	241
2017	修士課程	4	18	15	3	10	6	6	4	21	1	2		90
	博士課程	13	18	20	15	16	4	11	18	18	3	4	15	155
	外国人研究生	2	6	2	1	3	1		1	3	1			20
	合計	19	42	37	19	29	11	17	23	42	5	6	15	265

※「外国人研究生」に特別研究学生は含まない。

大学院留学生在籍数（出身国別）

		2015年度			2016年度			2017年度		
		27カ国			29カ国			33カ国		
地域	国または地域名	国費	私費	合計	国費	私費	合計	国費	私費	合計
アジア	パキスタン		1	1						
	インド	3	2	5	2	4	6	2	3	5
	ネパール	2	1	3	2	1	3	2	1	3
	バングラデシュ	1	2	3	1	2	3	3	2	5
	スリランカ	4	5	9	3	4	7	2	3	5
	ミャンマー	1	2	3	1	3	4	1	1	2
	タイ	7	2	9	8	3	11	6	3	9
	マレーシア	4	3	7	4	3	7	4	3	7
	インドネシア	4	3	7	3	6	9	5	7	12
	フィリピン	7	3	10	6	2	8	5	1	6
	韓国	3	11	14	2	8	10	2	8	10
	モンゴル	1	1	2						
	ベトナム	3	6	9	4	6	10	4	6	10
	中国	15	77	92	13	110	123	17	132	149
	カンボジア				1		1	1		1
	台湾		16	16		17	17		14	14
		小計	55	135	190	50	169	219	54	184
中近東	アフガニスタン		1	1		2	2		1	1
	小計		1	1		2	2		1	1
アフリカ	エジプト	1		1	1		1	1		1
	マダガスカル	1		1	1		1		1	1
	ケニア								1	1
	タンザニア								2	2
	ガーナ							1		1
	ジンバブエ	2		2	2		2	2		2
	ボツワナ	1		1						
	ブルキナファソ				1		1	2		2
	モザンビーク					2	2		2	2
	小計	5		5	5	2	7	6	6	12
オセアニア	オーストラリア		1	1		2	2		1	1
	小計		1	1		2	2		1	1
北米	カナダ					1	1		1	1
	アメリカ合衆国					2	2		2	2
	小計					3	3		3	3
中南米	メキシコ					1	1		1	1
	ボリビア							1		1
	ペルー								1	1
	エクアドル	1		1						
	コロンビア	1	1	2	1	1	2	2	1	3
	小計	2	1	3	1	2	3	3	3	6
ヨーロッパ	ドイツ	1		1	1		1		1	1
	スペイン	1		1	1		1			
	ポルトガル		1	1	1	1	2	1	1	2
	ブルガリア	1		1	1		1	1		1
	小計	3	1	4	4	1	5	2	2	4
	合計	65	139	204	60	181	241	65	200	265

(5) 国際交流室・国際学務支援チームの留学生への対応

本研究科・学部には、約280人の留学生が在籍しており、これらの留学生を支援することが国際交流室の主要な役割である。現在、国際交流室は常勤教員1名、特任専門職員1名と、3専攻から選出された教員（室長1名と室員2名）の計5名で構成され、留学生の生活環境改善、様々な悩みごとの相談と解決や事務手続きなどに関するサポートを行っている。また教務課国際学務支援チームでは、留学生の宿舍、ビザ申請等、事務手続きについての支援を行っている。

国際交流室では、本研究科・学部留学生向けの各種情報を日・英両言語で国際交流室ホームページに掲載するとともに、留学生関連資料・文書のバイリンガル化に力を入れている。そして、「留学生の手引」の作成、来日後に必要な情報提供、入学希望者や留学生のチューターからの問い合わせにも対応している。

また、毎年、日本の文化・伝統を体験できる見学旅行を実施している。学生・研究員・教職員の国際交流を促進するためYayoi International Dayも企画している。Yayoi International Dayは、学生がパワーポイントによる発表や楽器演奏、歌などを通して母国を紹介するイベントであり、併せて懇親会も開催している。さらに、弥生キャンパス内での国際交流を充実させるために、ジュニアスタッフ制度を利用し、毎年数回学生主体のイベントが実施されている。その他、留学生・外国人研究者が日本語を学び、日本の生活や文化・伝統に親しんでもらうことを目的として、日本人ボランティアの協力で「農学部日本語の会」が開かれているほか、Nogakubu International Alumni Network (NIAN) を通じて、本研究科・学部を修了・卒業した留学生とのつながりを持ち続けている。



Yayoi International Day-2016 発表者などの集合写真



見学旅行第1回：浅草寺（東京都内）



見学旅行第2回：東秩父和紙の里（埼玉県）

(6) 農学国際専攻での農学国際実地研究

農学国際専攻の大学院生には、カリキュラム「農学国際実地研究（海外実習）」の選択により単位を取得する機会が与えられている。この実習は、教員が引率する比較的短期間のスタディーツアーに参加する場合と、長期滞在型の調査研究を行う場合とがある。後者は、教員が参画している海外プロジェクト研究などでの協力関係をベースにして、海外の大学やFAOなどの国際機関に指導を依頼して行われることが多い。また、博士課程学生の場合は、国際学会等での研究成果発表も単位の一部としてカウントされる。

これらの多様な海外活動では、発展途上国の農山村地域の実態を把握する調査のみならず、食料・環境・エネルギー・貧困等の問題解決のためのプロジェクトに参加することもできる。そして、プロジェクトの批判的検討や、合理的に推進するためのスキームを構築したり、目的を達成するための科学的分析や政策提言の方法論について、国際協力の現場で実務に携わる人々と議論する機会もある。

（なお、大学院生は農学国際実地研究に要する経費の一部について、東京大学農学部創立百二十五周年記念事業によって創設された国際交流事業基金からの資金援助を申請できる。）

14

環境安全管理室の活動状況

教育研究活動の中でさまざまな実験や野外活動が行われる大学では、そこで生じがちな事故や災害を未然に防ぐ安全衛生管理が欠かせない。また、国立大学法人化によって労働安全衛生法他への対応が必要となった。そのため安全衛生管理にフォーカスした部署である環境安全管理室は以下のような教育研究活動への支援を行い、事故・災害の防止に努めている。

多数の研究室が多彩な活動を行っている当研究科では、各研究室共通の安全衛生活動の仕組みである教育研究安全衛生マネジメントシステム（MS）を、全学に先駆け導入した。MSの主な目的は潜在的な危険有害性の評価（リスクアセスメント）と安全確保技術の伝承による事故災害の防止である。MSのベースは一般企業等で採用されている労働安全衛生マネジメントシステムだが、これを教育研究の現場に適応するよう修正を加えた。2006年度(平成18年度)の4研究室による試行を経て、2007年度から附属施設を含む全研究室で本格的に始動した。始動に際しては2006年度MS発表会（1回）、MS説明会（9回）、民間企業等見学会（4回）等の開催や、MSワーキンググループによる活動推進を行った。2016年度(平成28年度)は、92%の研究室でリスクアセスメントに着手し、90%の研究室がplan-do-check-actの1年間の活動サイクルを回した。

当研究科の野外活動は年間600件前後にも及ぶ。学生だけで行う活動も多いため、2005年度に発生した無免許潜水作業中のリサーチフェローの死亡事故を受けて、2006年度から野外活動安全衛生管理計画書の事前提出を義務づけ、野外活動計画書ワーキンググループによる検討を毎週行い、野外活動時の事故防止に努めている。

新しく着任した教職員や新生生に対する安全衛生健康ガイダンス、消火訓練や避難・安否確認を含む総合防災訓練等様々な活動を行っている。実験用化学物質・廃棄物の管理状況の把握と助言、不要な試薬や物品の早期排出の促進、化学物質や紫外線露出から身を守る保護具の着用に関する助言、地震など災害時の物品の転倒・落下防止対策提示、カートへの不適切な分別廃棄への注意喚起等も行っている。2008年秋に旧附属農場において、農薬としての登録が失効し使用できなくなっていた水銀剤が使われたことが判明して以来、旧農場において特別の管理体制を組むなど、農薬の管理に特に注意をしている。

2016年度はクリーンベンチ内でエタノール蒸気に引火し2度の火傷、駅の階段で足を踏み外し右足を骨折する事故を含め、休業災害は7件であった。不休業災害（虫刺されを除く）は19件であった。そのうち屋内作業が7件を占め、ガラス等による切傷5件、患畜による咬傷3件等であった。人的災害を伴わない物損・設備災害は19件であった。

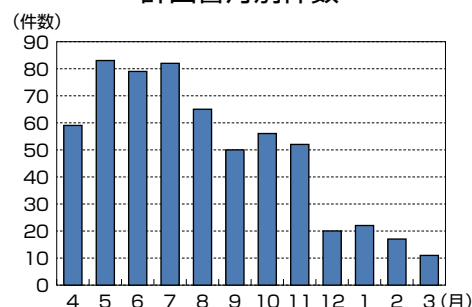
大学における教育・研究が先端的なものであればあるほど、それに対応した積極的な安全意識を身につけた若者の育成の支援も大学における環境安全管理室の責務である。

野外活動安全衛生管理計画書件数（平成28年度）

活動地	活動件数（A）	うち学生による活動件数（B）
海外	36（6%）	10（28%）
国内	560（94%）	107（19%）
一般	425（71%）	89（21%）
演習林	135（23%）	18（13%）
計	596	117（20%）

(B列の%：B/A)

計画書月別件数



水消火器による消火訓練



消火栓を用いた放水体験

(1) ハラスメント等相談窓口

近年、学生及び教職員の精神的な病やハラスメントに関わる事案が増加していることに鑑み、本学での対応とは別に研究科独自に以下のような複数の窓口を設けて対応している。

- 弥生ほっとライン（農学生命科学研究科・農学部の倫理相談窓口）
- 農学生命科学研究科ハラスメント等対策室
- 学生相談窓口
- 留学生相談窓口

(2) 男女共同参画推進企画室

国籍・性別にとらわれず多様な人材による知の創造と教育、社会との連携を通じて、日本の未来、世界の未来に対する公的な責任を果たすということは東京大学の使命です。このため、大学のさらなる活性化や発展には大学構成員の多様性の向上が欠かせないという共通認識のもと、2003年に「東京大学男女共同参画基本計画」が策定されました。さらにこれを推進するため、2006年に実施体制の中心として総長直轄の「男女共同参画室」が設置されました。また、2015年に公表された「東京大学ビジョン2020」においても、男女共同参画を促進することで大学組織の活性化を図ることが掲げられています。

農学生命科学研究科でも、2008年に男女共同参画室の連携組織として「男女共同参画推進企画室」が設置され、“女子学生のための進学選択情報の提供”や“女性研究者の育成と支援”のための活動を推進してきています。その結果、女子学生数が増加し、現在、学部学生での女性比率は25%を超え、農学生命科学研究科の大学院学生での女性比率は35%を超えています。また、「環境と食の研究に新風を一女性の感性を活かした農学革新」プロジェクトが「東京大学の女性研究者養成計画」により採択され、新たに3分野において女性の准教授が着任するなど、女性教員の増加にも積極的に取り組んでいます。今後も、さらに、農学生命科学研究科にかかわる多様な人々の活動をサポートしていきます。

(3) 産学官民連携室

本研究科が2005年に開始したアグリコクーン（産学官民連携型農学生命科学研究インキュベータ機構）プログラムをサポートするために産学官民連携室は設立されました。アグリコクーンでは、農学ならではの6つの学際的なテーマを設定して、分野横断的な授業、シンポジウム、プロジェクト研究などが実施されています。

6つのテーマとは、食の科学、バイオマス利用研究、国際農業と文化、生物多様性・生態系再生、情報利用研究、放射線影響です。テーマごとに「フォーラムグループ」が構成されていて、そこには専攻を超えた延べ72名の教員が参加しています。フォーラムグループをベースにそれぞれが特長ある活動を進めています。

6つのフォーラムグループ合計で15科目の授業が行われていて、毎年延べで約200名の大学院学生が受講してきました。2011年度からは一部の授業が学部学生も履修できるようになり、受講生が増えてきています。アグリコクーンの授業では、国内外の研究者や企業人を招いた講演やゼミナールを開催することが多く、通常の授業では触れないような最新の研究内容や実務面の奥深い話題を講義してもらっています。

アグリコクーンで企画されたシンポジウム等はこれまでの11年間に100回以上開催されました。多岐にわたる活動での事務一切を産学官民連携室が担当しています。アグリコクーンの活動は定型化されていないものが多く、最近では交換留学生の派遣や受け入れにおける支援など常に新しい課題に挑戦していますが、それらが円滑に進められるように産学官民連携室がサポートしています。

アグリコクーンでは、発足当初からホームページを利用した講義の案内、講義資料の配布、シンポジウムの広報活動を進めてきました。あわせてメーリングリストを利用した履修学生への連絡も行ってきました。これらの活動を続けて行く過程で蓄積されたノウハウを活かして、産学官民連携室はアグリコクーンだけにとどまらず研究科の教育・研究・広報活動に機会あるごとに関わっています。

アグリコクーンは異なった専攻から選ばれた約16名のティーチングアシスタントにも支えられていますが、産学官民連携室が彼らの活動の拠点となっています。これ以外に学生が参加できるイベントを企画・実行するなど、アグリコクーンを通じた専攻横断的な学生ネットワークの形成にも取り組んでいます。

16

自己点検・評価及び外部評価の実施について

2000年に第1回の自己点検・評価を完了し、ただちに外部評価に着手した。外部評価委員会には国内の有識者（8名）のほかに、国連大学のファンヒンケル学長も参加した。2001年3月の外部評価委員会では、教職員のみならず、学生との意見交換会を行い、研究教育の現状を余すところなく報告し、各評価委員から意見をいただくとともに、その結果を報告書にまとめた。その評価結果は、現在の研究科・学部の活動をおおむね支持していたが、一部の施設や研究スペースが不足、および老朽化していること、産業界との連携強化の必要性などの改善も求められた。

それらの意見に基づき、改善策を講じるとともに、2002年度には農学運営諮問会議を設置し、継続的に外部の有識者からの意見を求めている。2006年度には更なる活動強化に向けて、研究科内に再び自己点検評価委員会を設置し、広範な自己点検作業を開始した。

本研究科では、1991年から隔年で「研究者紹介」（当初は「年報」）を刊行していた。2003年度からは、ホームページ上で「研究者の紹介（研究者紹介データベース）」（<http://www.a.u-tokyo.ac.jp/researchers/index.html>）を公開している。このデータベースでは、研究科・学部（および関連する生物生産工学研究センター、アジア生物資源環境研究センター）に所属する教授、准教授、講師、助教、助手の氏名、学齢、職歴、研究活動、教育活動、社会活動等々の個人情報に加えて、過去5年以上の研究業績のデータを蓄積・検索できる。現在、このデータベースの充実を図り、自己評価等に活用していくための作業を進めている。これらの自己点検・評価関連の情報および関連活動の詳細はホームページ（<http://www.a.u-tokyo.ac.jp/>）にて公開している。加えて、2011年度には上記データベースのうち各研究者の教育・研究に関する業績を年報としてまとめ、隔年での再刊行を開始した。

なお、研究科の附属施設においても、自己点検活動は活発化しており、年報やニュースレターが刊行されている。



東京湾砂浜海岸での魚類相調査
（写真提供：生圏システム学専攻）



牧場実習の風景、ウマとの触れ合い第一歩
（写真提供：獣医学専攻）

17 予 算

(1) 収入・支出 (科研費は含まず)

(2016年度決算期：含 附属施設及び生物生産工学研究センター、アジア生物資源環境研究センター)

収入

科 目	決算額 (千円)
授業料	733,279
入学料及検定料	104,112
学校財産貸付料	72,216
寄附金受入	562,923
産学連携等研究収入	1,913,742
動物治療収入	644,301
農場及演習林収入	93,068
刊行物売払代	896
雑収入	12,366
学校財産処分収入	8,490
弁償及違約金	1,974
延納利子収入	0
計	4,147,367

支出

区 分	決算額 (千円)
人件費	1,459,709
物件費	2,809,587
計	4,269,296

※常勤人件費については、本部予算から支出のため含まず

(2) 外部資金等受入状況 (附属施設・寄付講座を含む)

(2016年度)

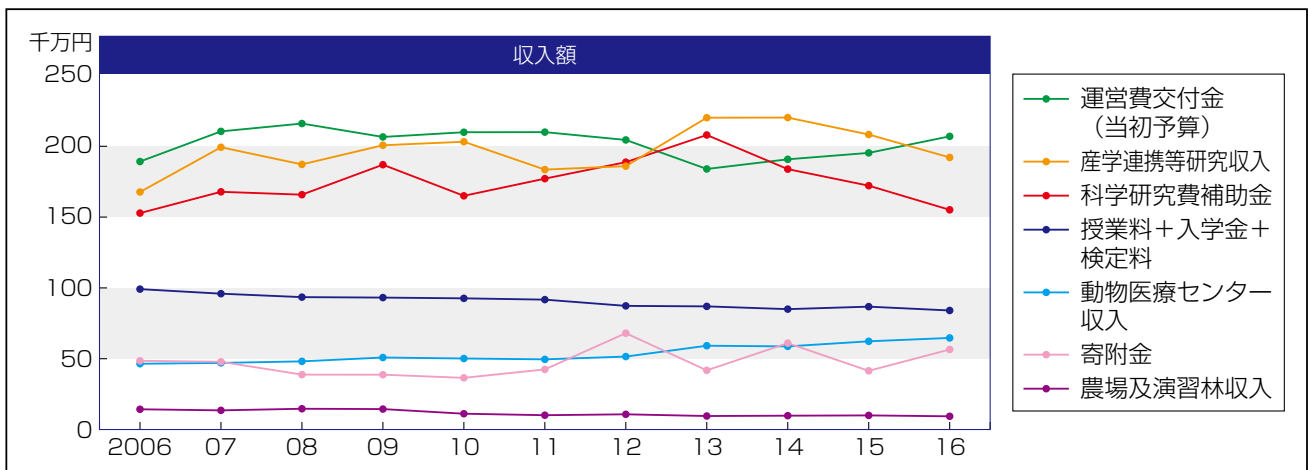
区 分	寄附金		科学研究費補助金		受託研究費		民間等との共同研究	
	件数	受入額 (千円)	件数	受入額 (千円)	件数	受入額 (千円)	件数	受入額 (千円)
農学生命科学研究科・農学部	258	481,684	381	1,431,860	132	1,592,445	151	202,754
生物生産工学研究センター	9	32,439	15	91,060	2	96,850	5	15,500
アジア生物資源環境研究センター	5	48,800	6	22,490	1	5,093	1	1,100
計	272	562,923	402	1,545,410	135	1,694,388	157	219,354

(3) 農学生命科学研究科・農学部収入合計額の推移

(含 附属施設及び生物生産工学研究センター、アジア生物資源環境研究センター)

(単位：千円)

年度	授業料 + 入学金 + 検定料	寄附金	産学連携等 研究収入	動物医療 センター 収入	農場及 演習林 収入	科学研究費 補助金	運営費 交付金
2014	846,742	607,627	2,194,184	584,756	97,373	1,831,675	1,900,677
2015	864,261	412,981	2,074,994	620,516	99,340	1,715,220	1,945,814
2016	837,391	562,923	1,913,742	644,301	93,068	1,545,410	2,062,119



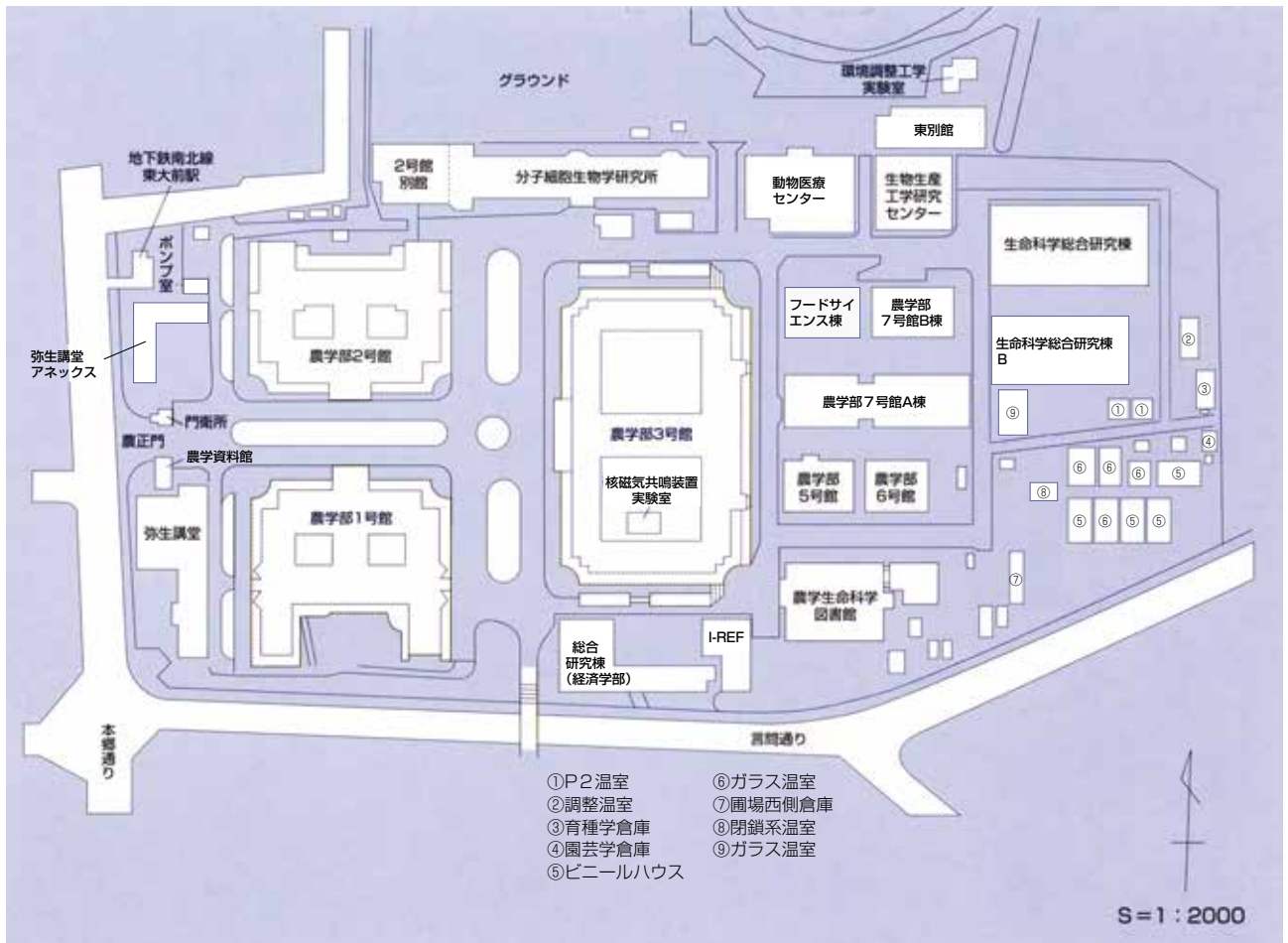
本研究科・学部では、学生及び教員・職員へ情報を提供する目的のほか、研究・教育内容の紹介など外部への広報活動のために、以下のような定期刊行物等を出版している。

(1) 刊行物一覧

名 称	発行回数	発行部数	主な配布先
大学院農学生命科学研究科・農学部概要	年1回	1,000	教員・職員、来訪者
大学院農学生命科学研究科・農学部英文概要	隔年	600	外国人来訪者
農学部便覧	年1回	800	学生・教員、他学部
農学生命科学研究科便覧	年1回	1,900	学生・教員
農学部授業時間割	年2回	1,200/回	学生・教員、他学部
弥生（農学部広報誌）	年2回	6,000/回	教員・職員、他学部、他大学、来訪者
農学生命科学研究科技術職員研修会資料集	年1回	200	教員・職員、他学部、他大学
21世紀を担う農学（進学ガイダンスパンフレット）	年1回	2,200	学生・教員
学生によるガイダンスブック	不定期	3,000	学生・教員
演習林概要（全演版）	隔年	2,000	学生、教員、職員、来訪者
演習林概要（各地方演習林版）	隔年	各2,000	学生、教員、職員、来訪者
演習林年報	年1回	700	教員・職員、他学部、他大学
演習林	年1回	700	教員、他学部、他大学
演習林報告	年2回		UTokyo Repository (http://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/bulletin/#47-0) で一般公開。 教員他学部、他大学に年1回2号合本の印刷版700部配布
科学の森ニュース	年4回	1,600/回	教員、職員、他大学
科学の森で学ぼう	年1回		PDF版を作成し、演習林HPで公開
附属演習林技術職員等試験研究・研修会議報告	年1回	440	教員、職員、他大学
浜名湖を巡る研究者の会	年1回	100	教員・職員、他学部、他大学
利用案内（農学生命科学図書館）	年1回	1,000	学生・教員・職員、来館者
農学部公開セミナー 講演要旨集	年2回	400/回	セミナー参加者
放射線育種場共同利用研究報告集録	年1回	100	教員、利用者、他大学
農学生命科学研究科・農学部研究者紹介データベース（研究者の紹介）	随時更新		HPからの一般公開 http://www.a.u-tokyo.ac.jp/
生態調和農学機構年報	年1回		機構HP（ http://www.isas.a.u-tokyo.ac.jp ）とUTokyo-Repository（ http://hdl.handle.net/2261/56434 ）で一般公開
生態調和農学機構紹介パンフレット	不定期	6,000	教員、職員、他学部、他大学、来訪者
食の安全研究センター紹介パンフレット	不定期	1,000	教員・職員、来訪者

(2) 公式ホームページなど

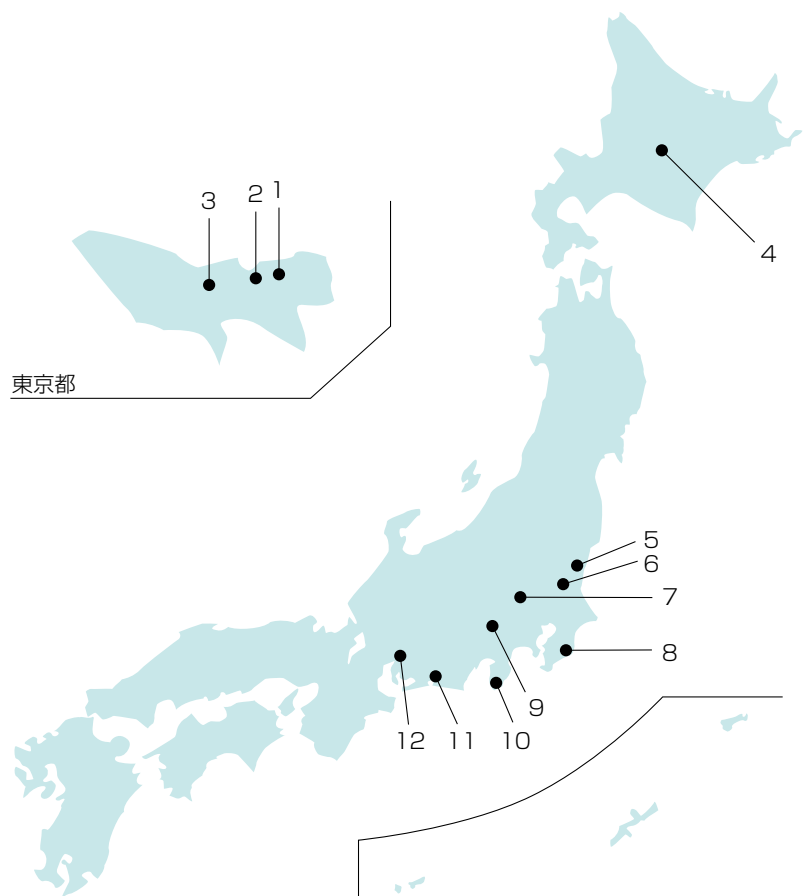
- ・ 農学生命科学研究科・農学部 <http://www.a.u-tokyo.ac.jp/index.html>
- ・ 生物生産工学研究センター <http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/biotech-res-ctr/>
- ・ アジア生物資源環境研究センター <http://www.anesc.u-tokyo.ac.jp/>



農学生命科学研究科・農学部配置図

附属施設等分布図

1. 弥生地区
2. 小石川樹木園
3. 生態調和農学機構西東京フィールド・田無演習林
4. 北海道演習林
5. 放射線育種場共同利用施設
6. 牧場
7. 秩父演習林
8. 千葉演習林
9. 富士癒しの森研究所
10. 樹芸研究所
11. 水産実験所
12. 生態水文学研究所





東京大学大学院農学生命科学研究科・農学部

Graduate School of Agricultural and Life Sciences / Faculty of Agriculture, The University of Tokyo

【発行】 東京大学大学院農学生命科学研究科・農学部広報室
〒113-8657 東京都文京区弥生1-1-1
TEL.03-5841-5484
HP <http://www.a.u-tokyo.ac.jp/>
